（独立行政法人教職員支援機構委嘱事業）

教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業

実 施 報 告 書

プログラム名	小・中・高を一貫する系統的なカリキュラム編成と運用に向けた教師のカリキュラム・マネジメント能力育成のための研修プログラムの開発
プログラムの特徴	新学習指導要領の趣旨に則し、教育内容の系統性を重視し幼小中高校の学びの一貫性を担保した教科横断的な教育課程を編成するカリキュラム･マネジメント能力を持つ教員の育成を目指す教員研修プログラムを開発する。同時に長野市の小中高一貫共通カリキュラムを開発し、各校の教育課程の編成にすべての教師が関われるよう OJT 研修の充実を図る。

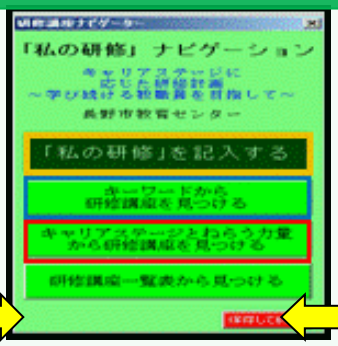
平成３１年３月

機関名　長野市教育委員会　　連携先　国立大学法人信州大学

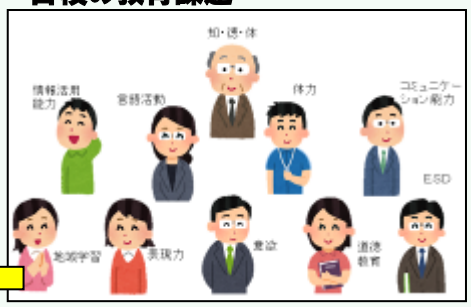
プログラムの全体概要

キャリアステージに応じた研修体系と自校の教育課題を踏まえ、「私の研修ナビ」を活用し、カリキュラム・マネジメント能力向上のための研修計画を立てる。

キャリアステージに応じた研修体系



自校の教育課題



キャリアステージに沿った研修講座を受講する。

自校の教育課題に応じた研修講座を受講する。

カリキュラム・マネジメントに係る研修講座

カリキュラム・マネジメントに係る講座を受講し、カリキュラム・マネジメントの重要性について認識を深め、自らがその主体であるという意識改革を図る。また、カリキュラム・マネジメントのノウハウを習得する。

「学校づくりとカリキュラム・マネジメント①」

カリ・マネで目指すもの

新学習指導要領において取り上げられているカリキュラム・マネジメントの理念や考え方を学ぶための講座

「学校づくりとカリキュラム・マネジメント②」

育みたい資質・能力とカリ・マネ

学校教育目標の具現していくための、カリキュラム・マネジメントの具体的な進め方を学ぶための講座

「学校づくりとカリキュラム・マネジメント③」

カリ・マネをしてみよう

学校教育目標の具現していくための、カリキュラム・マネジメントの具体的な進め方を学ぶための講座

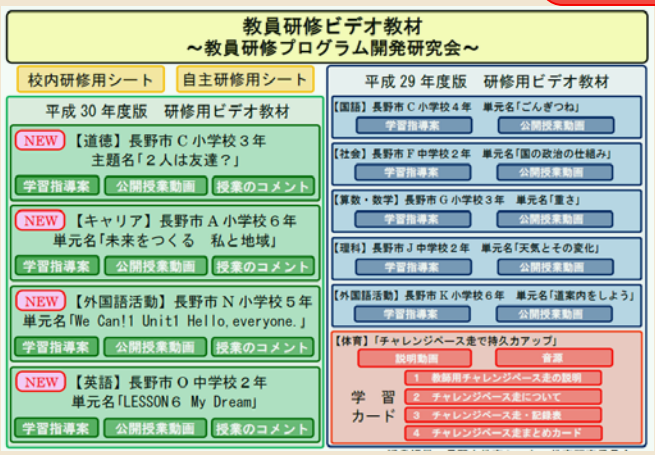
「多様性が生きる学校づくりとカリキュラム・マネジメント」

学校教育目標の具現に向けて、意図的・計画的に進める異学年合同活動の進め方を学ぶための講座

３回の連続講座でカリキュラム・マネジメントの理解、自校の現状分析、実際の進め方について学ぶ。

研修用ビデオ教材を活用する校内研修・自主研修

校内研修・自主研修を通して，単元や題材など内容や時間のまとまりを見通し，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る。



1　開発の目的・方法・組織

(1)　開発目的

新学習指導要領では、教員個々がカリキュラム・マネジメント能力を発揮し、小中高校を一貫する系統的・主体的・対話的な深い学びへと、子供たちを導く教育実践が求められている。さらに近年、社会的な要請等から、義務教育学校や中等教育学校の開校や、複数の小規模校による協働学習等、これまでの教育課程の範疇では収まりきれない教育環境の変化が生じている。そのような中、教師一人一人には、子供たち自らが「何を」「どのように」学ぶのか、「何をできるようにさせるのか」を明確にした学びの支援のあり方について、学校教育全体を見渡して描く能力が求められている。

そこで、本プログラム開発では、小学校から高等学校までを一貫する長野市版系統カリキュラムを開発し、その「カリキュラムを具現化するための教師のカリキュラム・マネジメント能力の育成を目的とする集合研修と OJT 研修のプログラム」の開発を目的とした。

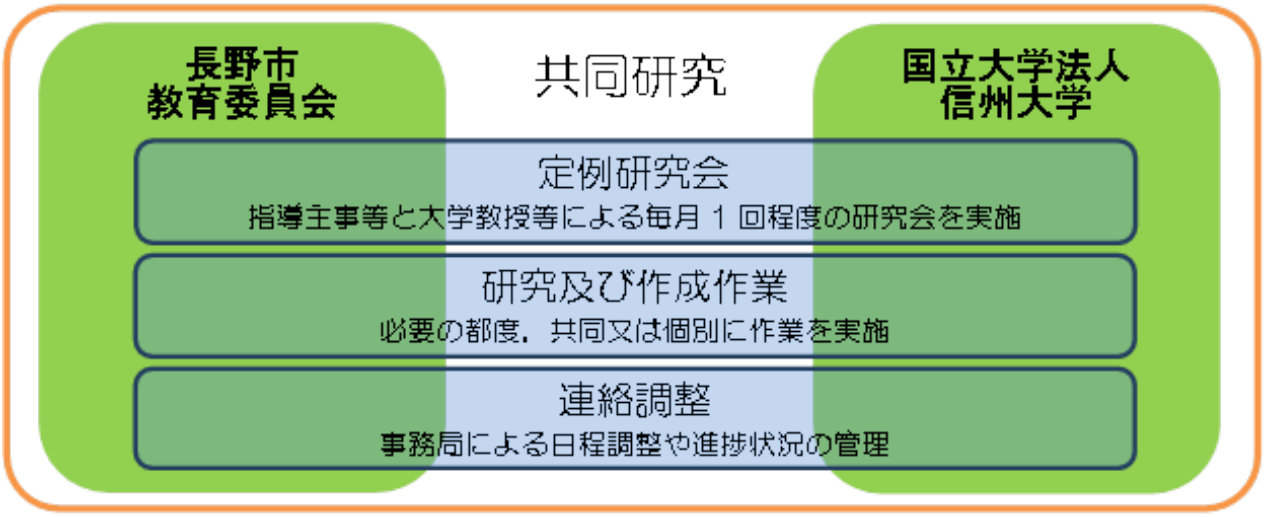
(2) 開発の方法

長野市教育委員会は、信州大学と連携し、教員研修プログラム開発研究会を設置し、以下の開発を行う。

① 長野市がこれまでに実施してきた研修を活かしながら、本プログラム開発の目的である小・中・高を一貫する教育課程の実施に向けた教員のカリキュラム・マネジメント能力育成のために研修内容を検討・実施し、検証を行う。研修内容は、講義中心の研修にならないように、各学校の取り組み及び自らの研究や実践の情報を交換したり、討議したりして、互いの教育実践の共有化を図ることができる研修にする。また、研修成果の検証は、受講者によるアンケート調査を行い、講座担当者が成果、課題について分析を行う。

② 長野市教育センター教育研究委員会の公開研究授業をもとに力量向上に対する校内研修や自主研修ができるように、研修用ビデオ教材を作成する。

(3) 開発組織



No	所属・職名	氏　名	担当・役割	備　考
1	長野市教育長	近藤　　守	主申請機関代表	
2	長野市教育委員会教育次長	永井　克昌	所管教育機関との調整	
3	長野市教育委員会学校教育課長	上石　秀明	教育委員会事務局の調整	
4	長野市教育センター所長	石塚　弘登	研究: 連携調整・カリキュラム開発	事務局
5	長野市教育センター所長補佐	長谷川 浩一	主申請機関担当者：庶務・調整	事務局
6	長野市教育センター主任指導主事	今井　睦俊	研究:カリキュラム開発	
7	長野市教育センター指導主事	傳田　伸和	研究:連携調整・カリキュラム開発	事務局
8	長野市教育センター指導主事	上原　伸	研究:カリキュラム開発・研修教材開発	
9	長野市教育センター指導主事	木村　公男	研究:カリキュラム開発・研修教材開発	
10	長野市教育センター指導主事	大上 みどり	研究:カリキュラム開発	
11	長野市教育センター指導主事	中澤　康匡	研究:カリキュラム開発	
12	長野市教育委員会主任指導主事	唐木　英俊	研究:カリキュラム開発	
13	長野市教育委員会主任指導主事	石川　順三	研究:カリキュラム開発	
14	長野市教育委員会指導主事	大日方 正壽	研究:カリキュラム開発	
15	長野市教育委員会指導主事	佐々木 秀	研究:カリキュラム開発・研修教材開発	
16	長野市教育委員会指導主事	直江　将志	研究:カリキュラム開発	
17	長野市教育委員会指導主事	齋藤　和久	研究:カリキュラム開発	
18	長野市教育委員会指導主事	千野布美子	研究：カリキュラム開発	
19	長野市教育委員会指導主事	山戸　俊彦	研究:カリキュラム開発・研修教材開発	
20	長野市教育委員会指導主事	伊藤　幸信	研究:カリキュラム開発	
21	長野市教育委員会指導主事	小林　仁志	研究:カリキュラム開発	
22	信州大学教授	小山　茂喜	研究:カリキュラム開発・研修教材開発	教育方法
23	信州大学准教授	谷塚　光典	研究:カリキュラム開発・研修教材開発	教師教育
24	信州大学准教授	荒井 英治郎	研究:カリキュラム開発・研修教材開発	教育行政学

2　開発の実際とその成果

(1) 平成 30 年度の実施講座（カリキュラム・マネジメント能力育成を目的とした研修の実施）

平成 29 年度までの研究成果を活用し、さらに発展深化したプログラムを開発する。具体的には、平成 30 年度に下記の講座を開設し、実証した。

講義・演習「長野市の子どもたちの学力向上を目指して-カリキュラム・マップの作成-」
講義・演習「学校組織マネジメント-チーム学校の推進-」
講義・演習「新学習指導要領の理念と実践-主体的・対話的で深い学び - 」
講義・演習「学年組織マネジメント-メンターとしてのキャリア形成-」
講義・演習「つながりを生かした学校づくり - カリキュラム・マネジメントとは - 」

①［平成 30 年度 カリキュラム・マネジメント能力育成・向上を目的とした研修講座一覧］

講座名	時数	目　的	研修の概要	講師
長野市の子どもたちの学力向上を目指して-カリキュラム・マップの作成-	160分	学力向上に向けて市内小・中学校の実践を学んだり、他の学校と情報交換したりすることを通して、自校の学力向上計画を見返したり、実践への見通しを持つことができる。	○長野市の子供たちの学力の実情を考える講義 ○学力向上に向けた取り組みの実践発表 ○中学校区別の情報交換、自校の年間計画づくりの演習	市教委指導主事 市立小中学校教諭
学校組織マネジメント-チーム学校の推進-	160分	･教務主任としての役割を理解する。 ・最新の教育事情に基づいた組織マネジメントについて理解する。 ・「学校組織」という視点で問題解決の方法を考える。	○教務主任としての役割を理解する講話 ○チーム学校としての学校のあり方の講義 ○チーム学校の推進と組織マネジメントの演習	長野市教育センター所長 大学教員
新学習指導要領の理念と実践-主体的・対話的で深い学び -	160分	・最新の教育事情と新学習指導要領の理念について理解する。 ・主体的・対話的で深い学びについて理解する。	○現在の教育事情と新学習指導要領の理念の講義 ○「主体的・対話的で深い学び」の実現と学力向上の講義と実践発表	大学教員 市立中学校教諭
学年組織マネジメント-メンターとしてのキャリア形成-	160分	・メンターとして活動する必要性を理解する。 ・基本的な学年組織マネジメントの考え方、進め方、活性化について理解する。	○学年組織マネジメントの講義 ○グランドデザインや戦略マップ作成の演習と情報交換	市立中学校教頭 市教委指導主事
「つながり」を生かした学校づくり - カリキュラム・マネジメントとは -	160分	・子どもたちの学力を伸ばせる学校を目指し､自校の取組について､「つながり」をキーワードに考える。 ・第二期しなのきプラン初年度となる平成 30 年度前半の学力向上の取組を振り返るとともに、10 月から 3 月までの取組について情報交換し、今後の取組について考える。	○「つながり」と学びの充実の講義 ○学力向上に関する小・中学校別の情報交換	大学教員 市教委指導主事

②研修講座反省

平成　30　年度　研修講座の反省

研修区分	学力・体力の向上を図る研修	講座番号	8192	受講者数	78 名
講座名	長野市の子どもたちの学力向上を目指して				
講師氏名	市教委指導主事／市立小中学校教諭			連絡先	

実施期日	平成 30 年 5 月 14 日(月)
担当室	研修・研究担当
担当者	指導主事

講座の反省と次年度への課題

【アンケート結果】

年代	20代	30代	40代	50代	60代	未記入
人数	2	12	40	20	1	3
	3	16	53	27	1	−

職種	教諭	講師	養教	管理	他	未記入
人数	65	2	0	3	0	7
	93	3	0	4	0	−

(Aかなりそう思う、Bどちらかというとそう思う、Cどちらかというとそう思わない、Dそう思わない)

	評価項目	A	B	C	D	未	AB	CD
Ⅰ全体評価	1 本講座はあなたにとってよいものだったか	32	42	2	0	2	74	2
		42	55	3	0	−	97	3
	2 演習・テキスト・資料等の内容は、今後に役立つか	33	37	4	0	4	70	4
		45	50	5	0	−	95	5

【考察】

1　研修講座の概要

・講義「長野市の子どもたちの学力の実情を考える」（指導主事）
・市内小・中学校の研究主任による実践発表
・中学校区別の情報交換、自校の年間計画づくり（演習）

2　受講者の感想から

(1)実践発表より

・3 校の研究実践がとても参考になり、刺激になりました。今までの授業観、子どもへのかかわり方、環境づくりのあり方等をいろいろ工夫され、自校の学力向上に取り入れていけそうなことがあることに気づきました。
・本校でも一人一公開を行っているが、その公開をより効果的に行うための方法を徳間小の実践報告から得ることができありがたかった。
・実践発表が大変参考になりましたが、それを支えるのは同僚性だなと思いました。
・全職員が同じ方向を向いて動き始めることが大切だと感じました。

(2)グループでの情報交換より

・単級の学校だと、こういう研修で刺激を受けることができ、学校へ戻って頑張ろうという意識になりました。
・具体的な資料（家庭学習、日課等）を基に話を聞くことができ、今後の実践への見通しを持つことができた。
・本校でも取り組んでみたい、あるいは変えていきたいと思うことが多々あった。
・同じ規模の学校をグループにしてあったので、同じような課題があり、参考になった。

(3)その他

・私たち職員が力を合わせ、本気で「子どもの学び」を構築することが大切である。今年度は「学習相談システム」の確立に努めます。
・NRT、分析も含めて活用していきたい。
・学力向上だけでなく、子どもを育てていくには担任一人の力ではなく、学校体制で支えていくことを職員一人一人が自覚し、横のつながりを築いていく学校づくりを願っていきたい。
・公開を嫌がる先生も多く、働き方改革のことを考えると、さらにやってくださいとお願いするのも難しい状況ですが、みんなで考え、なんとかよくなるよう努力したいと考えています。
・複式授業についての情報については勉強する必要を感じました。

3 反省と次年度への課題

・実践発表は大変好評であったが、中学校大規模校の発表や NRT の生かし方の発表等について、要望もあるので来年度に生かしていきたい。
・学力にかかわって、複式学級での授業方法に対する不安や要望もあるが、研修講座として取り上げることは難しいと思われる。（主事が出向いて研修する方向を学校教育課へ伝えていく）

平成　30　年度　研修講座の反省

研修区分	マネジメント力の向上を図る研修	講座番号	3101	受講者数	15 名
講座名	学校組織マネジメント				
講師氏名	長野市教育センター所長／大学教員			連絡先	

実施期日	平成 30 年 5 月 15 日(火)
担当室	研修・研究担当
担当者	指導主事

講座の反省と次年度への課題

【アンケート結果】

(Aかなりそう思う、Bどちらかというとそう思う、Cどちらかというとそう思わない、Dそう思わない)

年代	20代	30代	40代	50代	60代	未記入
人数	1	0	9	4	1	0
	7	0	60	27	7	−

職種	教諭	講師	養教	管理	他	未記入
人数	15	0	0	0	0	0
	100	0	0	0	0	−

評価項目	A	B	C	D	未	AB	CD
1 本講座はあなたにとってよいものだったか	10	5	0	0	0	15	0
	67	33	0	0	−	100	0
2 演習・テキスト・資料等の内容は、今後に役立つか	10	5	0	0	0	15	0
	67	33	0	0	−	100	0

【考察】

1　研修講座の概要

・教務主任に期待すること（所長講話）
・チームとしての学校のあり方（講義）
・チーム学校の推進と組織マネジメント（演習）

2　受講者の感想から

(1)講話より

・所長講話「正義を愛し、未来を見据え、誠実に行い、へりくだる」心に残りました。身につつまされることばかりでした。親身になって、様々なことをご指導いただき大変勉強になりました。今後のイメージがもてました。

(2)講義より

・非常に中身が濃く、勉強になりました。数値で表されると、はっきりと分かり、今の学校を何とかするのではなく、今後、どのようにしていけばよいかの方向が見えてきた気がします。たいへん参考になりました。
・最後の事例では、学校組織としての在り方という視点で具体的に考えることができとても良かったです。「チーム学校」という自分の立場、責任を考えて行きたいと思います。

(3)その他

・具体的な事例に対して向き合うと、迷ったり考えたりする自分がおり、グループ討議でいろんな意見を聞き、チームで対応するよく分かった気がする。情報を共有して一人で抱え込ます知恵を出し合って対応していくことの大切さが理解できた。
・短時間でしたが、とても内容が充実していて勉強になりました。具体的な事例でのグループや隣の方との意見交換はたいへん参考になりました。・個の経験を重ねて自己の指導法を確かにするだけでなく、チームとして、何を優先して考え、誰がどのように動くと良いのか、今後はそのような視点をもっていきたい。

3 反省と次年度への課題

・本年度から希望研修となり、受講者は 15 名であったが、目的を持って参加しており充実した研修となった。
・荒井准教授の豊富な資料、事例は学ぶこと多い。受講者にも好評である。引き続き講師をお願いしたい。

平成　30　年度　研修講座の反省

研修区分	学力・体力の向上を図る研修	講座番号	4311	受講者数	42 名
講座名	新学習指導要領の理念と実践				
講師氏名	大学教員／市立中学校教諭			連絡先	

実施期日	平成 30 年 6 月 28 日（木）
担当室	研修・研究担当
担当者	指導主事

講座の反省と次年度への課題

【アンケート結果】　（Aかなりそう思う、Bどちらかというとそう思う、Cどちらかというとそう思わない、Dそう思わない）

年代	20代	30代	40代	50代	60代	未記入
人数	2	9	15	13	0	3
	5	23	38	33	0	－

職種	教諭	講師	養教	管理	他	未記入
人数	32	6	1	1	0	2
	80	15	3	3	0	－

	評価項目	A	B	C	D	未	AB	CD
Ⅰ全体評価	1 本講座はあなたにとってよいものだったか	16	26	0	0	0	42	0
		38	62	0	0	－	100	0
	2 演習・テキスト・資料等の内容は、今後に役立つか	24	18	0	0	0	42	0
		57	43	0	0	－	100	0

【考察】

1　研修講座の概要

・現在の教育事情と新学習指導要領の理念（講義）

・「主体的・対話的で深い学び」の実現と学力向上（講義と実践発表）

2　受講者の感想から

(1)講義より

・日々、教科指導、学級経営、生徒指導、部活指導に追われ教育の最新事情に疎くなっていた自分にとっては、谷塚先生のお話しされた動向や深い学びにつながる学習過程の演習は、大変勉強になりました。

・前半にしていただいた実践発表を基に、具体的に学習過程にあてはめて説明していただいたところが分かりやすかったです。日々の授業で問題を解決していく学習過程を意識してサイクルになるようにしていけたらと思いました。

・各教科の学習過程のイメージが分かった。実際に自分の授業に生かしたり、他の先生の授業を分析したりする演習もあり明日からの授業に生かせると感じた。資料も詳しくてよかった。先生方に紹介したい。

(2)実践発表より

・生徒が自ら知りたい！追究したい！と思える教材の提示が素晴らしいと思いました。後は、生徒たちが自然にかかわり合いながら真実を見つけていく流れになっていく主体的な学びができるのですね。追究の楽しさを感じながら学んでいることがスライドの表情からも伝わってきました。

・中村先生の実践発表は、委員会の方向と実践がマッチしていて、宙に浮いていない地に足が着いている実践で、方向性、研究、視点がとても参考になった。複数形の予想の「～だから」が対話的な学びで大事だということが分かった。

・理科の実践、とても流れがよく生徒もよく追究したことが分かる授業でした。乾くということが科学的に説明でき理解につながった。

3 反省と次年度への課題

・実践発表は、「主体的・対話的で深い学び」に向けての教材研究、導入の仕方、深い学びを引き出す発問、思考の可視化等参考になったという感想が多かった。また、谷塚先生に実践発表に基づき具体的な学習過程を説明していただき受講者の理解も深まった。ワークショップで自分の授業を見返すことができ実践的な講座となった。

・講義を「もっと詳しく聞きたかった」という意見もあったので、時間配分を検討したい。

・「主体的・対話的で深い学びの『深い学び』については、どのぐらいが「深い」授業でどう評価するのか…という感想に見られるように、『深い学び』の評価を今後の課題としていきたい。

平成　30　年度　研修講座の反省

研修区分	マネジメント力の向上を図る研修	講座番号	3102	受講者数	12 名
講座名	学年組織マネジメント				
講師氏名	市内中学校教頭／市教委指導主事			連絡先	

実施期日	平成 30 年 6 月 29 日(金)
担当室	研修･研究担当
担当者	指導主事

講座の反省と次年度への課題

【アンケート結果】　(Aかなりそう思う、Bどちらかというとそう思う、Cどちらかというとそう思わない、Dそう思わない)

年代	20代	30代	40代	50代	60代	未記入
人数	0	3	6	3	0	0
	0	25	50	25	0	–

職種	教諭	講師	養教	管理	他	未記入
人数	12	0	0	0	0	0
	100	0	0	0	0	–

	評価項目	A	B	C	D	未	AB	CD
I 全体評価	1 本講座はあなたにとってよいものだったか	1	9	2	0	0	10	2
		8	75	17	0	–	83	17
	2 演習･テキスト･資料等の内容は、今後に役立つか	2	8	2	0	0	10	2
		17	67	17	0	–	83	17

【考察】

1　研修講座の概要

・学年組織マネジメント（講義）

・グランドデザインや戦略マップ作成（演習と情報交換）

2　受講者の感想から

・学校の目的、存在意義、ミッションから学校を見直してみることがとても新鮮だった。その学校が置かれている状況（社会全体、地域）から見ていくと、学校の果たすべき役割が見えてくる。学校の中だけにいて、生徒ばかり見ていると視野が狭くなってしまう。さまざまな視点で見て考える必要性を感じました。

・学校組織マネジメントを考えながら、学年についても考えることができました。学校で考えるならば、学校目標を達成するために、学校長のビジョンがあり、それを達成するために教職員一同が一体となって行動することが大切ということを感じました。

・今までは、自分、余裕の少しあるときは学年までは目を向けて考えただけだったが、内、あるいは、外から見た学校と視野･視点を変えて見る､考えることの中から、自分にできること、または、今後自分がやっていかなくてはならないことを考えることができた。

・学校全体、学年全体に目を向ける時間をいただきました。今まで通りのことをやっているだけでは社会の変化に対応できないのだということを教えていただきました。過去の先輩方が積みあげてきたものを引き継ぐとともに、他の先生方と共に変革を模索するように努力したい

3 反省と次年度への課題

・「マネジメントすごろく」を活用しながら、具体的なマネジメントの進め方について学んだ。グループで１つの「マネジメントすごろく」を話し合いながら仕上げる活動も今後考えたい。

・中央研修の伝達をしていただくせっかくの機会であったが、受講希望者 12 名と少なく残念であった。グループ活動を取り入れても、少人数だと多様な意見が出にくく深まりに欠けてしまう。学校マネジメントと内容面でも重なるところもあるので、「学校マネジメント」講座（16 名受講）との統合、あるいは重点講座に指定するなど検討したい。

平成　30　年度　研修講座の反省

研修区分	学力･体力の向上を図る研修	講座番号	8191	受講者数	80 名
講座名	「つながり」を生かした学校づくり				
講師氏名	大学教員／市教委指導主事			連絡先	

実施期日	平成 30 年 10 月 5 日(金)
担当室	研修･研究担当
担当者	指導主事

講座の反省と次年度への課題

【アンケート結果】

(Aかなりそう思う、Bどちらかというとそう思う、Cどちらかというとそう思わない、Dそう思わない)

年代	20代	30代	40代	50代	60代	未記入
人数	2	10	37	26	1	4
	3	*13*	*49*	*34*	*1*	*－*

職種	教諭	講師	養教	管理	他	未記入
人数	74	0	0	3	0	3
	96	*0*	*0*	*4*	*0*	*－*

	評価項目	A	B	C	D	未	AB	CD
I 全体評価	1 本講座はあなたにとってよいものだったか	20	50	7	0	3	70	7
		26	*65*	*9*	*0*	*－*	*91*	*9*
	2 演習･テキスト･資料等の内容は、今後に役立つか	13	57	7	1	2	70	8
		17	*73*	*9*	*1*	*－*	*90*	*10*

【考察】

1　研修講座の概要

･「つながり」と学びの充実(講義)

･学力向上に関する小･中学校別情報交換

2　受講者の感想から

(1)講義より

・日頃漠然と考えていた「つながり」の大切さを論理的に話してくださり、明確に「つながり」の大切さを意識できるようになったよい機会でした。

・人間関係のつながりが学力を高めるという話は実感として納得しました。やはり、基本はクラスを高めることにあると思いました。

・授業の中で子どもの「つながり」「かかわり」をどう意識づけ、位置づけるかが課題である。

・「習慣こそが意欲につながる。学習習慣がついていれば、意欲に働きかけなくても済む」という言葉をお聞きして、驚きました。低学年での習慣化がいかに大切であるかということがよく分かりました。

・すべての学習は自尊感情から生まれるということは、今、目の前で学習している子どもたちの生活をみていると全くその通りだと感じた。自尊感情の低い子は確かに学習意欲が薄い。また、小学校生のうちは学習の習慣をつけることを大切にしていくと学習意欲が高くなっていくが、中高生になっていくとそれだけでは満足いく結果が得られず、目的意識を持った学習の積み上げの大切さを感じる。

・Ｃ学力の根に当たる部分として、根冠＝自尊感情、根毛＝学習習慣、成長点＝目的意識の例がよく分かり納得できました。

(2)　情報交換より

・同じ規模の学校で取り組みの様子を情報交換するのは大変有意義で、明日からの実践につながるヒントもありました。

・他校の取り組みを知れて意義の深い時間となりました。NRT の小問分析を学校の職員研修で行えたらいいなと思いました。

・宿題は定着する目的で学年で統一して出すこと、保護者に取り組みを伝えること、(学力) 向上の担当者を決め誰が何をするのかはっきりさせること、を学びました。

(3)　その他(働き方改革に関連して､等)

・NRT 分析、細かくやる大切さは分かるのですが、文面にすることはとても苦労することが分かり、なかなか他の先生方にお願いできないな、と思いました。

・野球もそうだが、秋田県は低いという結果が出た問題について、本気で改善していく。お金と知恵と時間を充てる。長野も人任せでなく本気で考えないといけない。

・複式の実施に向けてもう少し準備期間（２～３年）がほしいと思っています。（話しが急で負担の大きさが心配)

3 反省と次年度への課題

・講座の内容、時間配分についての意見があった。内容については講義が必要なのか、必要ならどんな講義にするのか検討していきたい。また、情報交換の時間や方法については、講義の有無とも関連づけながら考えていきたい。1 回目 2 回目を通して課題別グループをつくり検討し合うことも考えられる。

③成果

・学力向上を目指し自校の年間計画を見直したり、教務主任・研究主任等の立場からグランドデザインを作成したりする演習を通して、カリキュラム・マネジメントの推進について見通しを持つことができた。その際、代表校の実践発表や大学教員による講義から、カリキュラム・マネジメントを進める具体的な手法や学校組織として取り組む重要性について理解することができた。

・子どもの学びを構築していくためにカリキュラム・マネジメントを更に進めていく必要があることや教員自らが中心になって進めていくことなど、本研修を通して受講者の意識改革を促すことができた。

④課題と改善策

・受講者による講座終了後のアンケートを見ると、どの研修も概ね充実した研修であったことがうかがえる。しかし、「本講座はあなたにとってよいものだったか」に対してＣ（どちらかというとそう思わない）と評価した受講者もいる。その理由として、カリキュラム・マネジメントの意義や重要性について十分理解できず、今後の取り組みについて具体をイメージすることができなかったことが推察できる。このことは、教員のカリキュラム・マネジメント能力育成を目的とした研修プログラムにおいて、課題であることを示している。そこで、カリキュラム・マネジメントの理解から始まり、各校における実態分析や今後の具体の取り組みを決め出すという一連の流れをより実践的に研修できる講座を構築し、教員のカリキュラム・メネジメント能力の育成を目指していく必要がある。

(2) 平成 31 年度新たに構築した講座（カリキュラム・マネジメント能力育成を目的とした研修の開発）

①研修講座「学校づくりとカリキュラム・マネジメント」

ア 研修の背景やねらい

新学習指導要領で取り上げられてカリキュラム・マネジメントの理念や考え方について、学校現場に十分浸透していない現状がある。また、意図的にカリキュラム編成を進める経験が少ない教師も多く、具体的に何をどのように進めることがカリキュラム・マネジメントなのかイメージを持てずにいる教師もいる。

そこで、カリキュラム・マネジメントの概念の理解を進め、現場の教師が抱いている疑問や懸念などに対する解決の視点を示しながら、カリキュラム・マネジメントを進めるための具体的な手法を身に付けられるようにするための研修を考える。そして、学校教育目標の具現を目指し、各学校で育成すべき資質・能力を明確にしながら、「ＰＤＣＡサイクルの確立」「教科横断的な視点」「人的・物的資源の効果的な組み合わせ」という３視点をもとに、カリキュラム・マネジメントを推進できる教員の育成を目指した研修講座を構築する。

イ 対象、会場、講師

対象　市内小中学校　教務主任・研究主任・学年主任等、各校のミドルリーダーや中堅研研修受講程度、またはそれ以降のキャリアステージを迎えている教職員

会場　長野市教育センター

講師　信州大学教授 准教授・市指導主事

ウ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

カリキュラム・マネジメントを推進できる教員を育成するため、研修講座を３回に分けた連続講座を設け、受講者が段階をおって理解できるようにした。

そこでまず始めに、新学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントの考え方を知り、カリキュラム・マネジメントの実践事例から、その具体をイメージできるようにする。

次に、全国学力・学習状況調査や学校評価等から、自校の現状分析をし、その中から育みたい資質・能力を決め出す。

そして最後に、自校の学校教育目標を具現するためのグランドデザインやカリキュラム・マネジメント表を作成し、情報交換することを通して、様々なアイディアに触れ、更に具体的なカリキュラム・メネジメントの見通しを持てるようにする。

以上の研修を通して、各校においてカリキュラム・マネジメントを推進できる教員の育成を目指す。

講座名 -副題-	期日	講座の概要	講師
学校づくりとカリキュラム・マネジメント① ーカリ・マネで目指すものー	6月24日（月）	・学習指導要領とカリキュラム・マネジメント（講義） ・カリキュラム・マネジメントの実践事例の紹介 ・学校教育目標の分析（グループ討議）	大学教員２名 市教委 指導主事
学校づくりとカリキュラム・マネジメント② ー育みたい資質・能力とカリ・マネー	8月7日（水）	・各校の現状分析・課題把握（グループ討議） ・育みたい資質・能力や重点指導項目（グループ討議）	市教委 指導主事
学校づくりとカリキュラム・マネジメント③ ーカリ・マネをしてみようー	11月12日（火）	・サンプルフォーマットにそったカリキュラム・マネジメント表の作成（演習） ・受講者が作成したカリキュラム・マネジメント表に学ぶ（情報交換）	大学教員２名 市教委 指導主事

エ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方詳細等

<table>
<tr><td>講座番号</td><td>3401</td><td>2 講座名</td><td>学校づくりとカリキュラム・マネジメント①</td></tr>
<tr><td>開催日</td><td>6 月 24 日</td><td>3 副題</td><td>カリ・マネで目指すもの</td></tr>
<tr><td>講座の目的</td><td colspan="3">新学習指導要領において取り上げられているカリキュラム・マネジメントの理念や考え方を学ぶための講座</td></tr>
<tr><td>講座の
到達目標</td><td colspan="3">・新学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントの考え方を知る。
・カリキュラム・マネジメントの実践事例から、その具体をイメージすることができる。</td></tr>
<tr><td>概　要</td><td colspan="3">1　市教育員会指導主事による、学習指導要領とカリキュラム・マネジメントについて講義
2　カリキュラム・マネジメントの実践事例の紹介
3　グループ討議による学校教育目標の分析</td></tr>
<tr><td>講　師</td><td colspan="3">大学教員２名／市教委指導主事</td></tr>
<tr><td>進め方</td><td colspan="3">1　カリキュラム・マネジメントの概要説明（３０分＋５分）
市教育委員会指導主事による講義（パワーポイント）
・新学習指導要領の方向性やカリキュラム・マネジメントの理念（３０分）
・大学教員による補足説明（５分）
教材：プレゼン

2　実践事例の紹介（２校）（２０分＋１０分）
各校１０分程度の発表（計２０分）＋大学教員の講評（１０分）
候補校　・青木島小「キャリア教育」、中条中「幼保小中高」

3　学校教育目標の分析（６０分＋１０分）
教材：分析メモ
・３～４人グループを作り、互いの学校のグランドデザインを見ながら、カリキュラム・マネジメントの視点にそって発表及び、意見交換を行う。
・同規模、同校種でグルーピングをする。第２回の講座、第３回の講座も同様のグループで研修を進める。
<table><tr><th>演習の進め方</th></tr><tr><td>（１）進め方の説明（指導主事）（１０分）
（２）自校のグランドデザインを以下の観点で分析し、分析メモに記入して、発表の準備をする。グランドデザインに示されていない部分は口頭で説明する。（１５分）
①「つける力」「目指す姿」の説明
②児童生徒や地域の実態と「つける力」「目指す姿」のつながり
③「つける力」や「目指す姿」と各活動の相互関係・一貫性
④ＰＤＣＡの中の、特にＣやＡの仕組みについて
⑤「つける力」「目指す姿」を具現するための枠組みや、地域や外部との連携の仕組みについて
⑥自校の教職員の方向性の共有をどのように図っているか。
（３）各校が持ち寄ったグランドデザインを交換し、分析メモにそって説明する。一校あたり発表時間は５分。（計２０分～２５分）
（４）グランドデザインの作成のポイントについて意見交換を行う。（１０分）
（５）大学教員の講評（１０分）</td></tr></table>4　次回の研修に向けての事前準備についての連絡（５分）</td></tr>
</table>

講座番号	3402	2 講座名	学校づくりとカリキュラム・マネジメント②
開催日	８月７日	3 副題	**育みたい資質・能力とカリ・マネ**
講座の目的	**学校教育目標の具現していくための、カリキュラム・マネジメントの具体的な進め方を学ぶための講座**		
講座の到達目標	・全国学力・学習状況調査、学校評価等から、学校の現状分析を行う方法を学ぶことができる。 ・自校の現状分析から、育みたい資質・能力の決め出しについて考えることができる。		
概　要	１　グループ討議による、各校の現状分析を行い、課題把握を行う。 ２　現状分析をもとに、育みたい資質・能力や重点指導項目の決めだしを行う。		
講　師	市教委指導主事		

進め方

１　各校の現状分析と課題把握

（１）現状分析方法の説明 **（２０分）**

・指導主事による分析方法のポイントの説明

・パワーポイントで説明

・その後の分析研修の進め方の説明

教材：プレゼン

（２）以下の資料をもとに、各校の現状分析をグループで行う **（９０分）**

◇全国学調質問紙調査（経年データ）

◇学校評価（前年度分）

◇全国学調教科の結果（当年度分）

教材：分析シート

・グルーピングは、第一回と同様。（３～４校で一つのグループ）

・一校２０分程度の時間をかけ、各校の「強み」「弱み」の両面を出すようにする。

演習の進め方
①各自が持ち寄った自校の資料を交換する。 ②一校ずつ順番に分析する。 ・資料を見て、強みと思われる部分、弱みと思われる部分を出し合う。 ・当該校の参加者は、自分の分析シートにメモする。 ※いろいろな視点から分析することを目的とすることを伝えておく。一人よりも多くの目で見ること、学校外の立場から見ることの必要性も伝えておく。

２　現状分析をもとに育みたい資質能力のきめ出しと情報交換 **（２０分）**

演習の進め方
１　自校のグランドデザインと、「強み」「弱み」の分析シートから、自校で育みたい資質能力・目指す姿、のきめ出しを行い、シートに記入する。（１５分） ２　となりの参加者と情報交換を行う（５分）。

３　次回の研修に向けての事前準備についての連絡 **（５分）**

※三回目の講座で使うワークシートを事前に配布しておく。

講座番号	3403	2 講座名	学校づくりとカリキュラム・マネジメント③
開催日	11 月 12 日	3 副題	カリ・マネをしてみよう
講座の目的	学校教育目標の具現していくための、カリキュラム・マネジメントの具体的な進め方を学ぶための講座		
講座の到達目標	・自校の学校教育目標を具現するためのグランドデザインやカリキュラム・マネジメント表を作成することができる。 ・他の先生が作成したカリキュラム・マネジメント表から、様々なアイディアを知ることができる。		
概　要	1　サンプルフォーマットにそって、カリキュラム・マネジメント表を作成する。 2　情報交換により、他の参加者が作成したカリキュラム・マネジメント表の内容から学ぶ。		
講　師	大学教員２名／市教委指導主事		
進め方	1　カリキュラム・マネジメント表の作成 ・指導主事によるカリキュラム表作成の手順の説明 **（２０分）** 教材：プレゼン 2　カリキュラム・マネジメント表の作成 **（４０分）** ・自校のカリキュラム・マネジメントについて、付箋を色分けしながら、自分のアイディアを構想図に書いていく。 ・手書きで作成する。 ・グループの形になって行い、適宜意見交換をしながら進める。 教材：カリキュラム・マネジメント構想図 3　グループでの発表会 **（４０分）** ・発表と質疑を含めて１校あたり１０分程度 ・その都度、他の参加者のアイディアを、自分の構想図に加えていく。 4　数校を取り上げての全体発表及び大学教員の講評 **（３０分）** ・大学教員二人がそれぞれ１名を指名して、全体発表の場を設ける。 ・その後、大学教員による講評を行う。 ・１校あたり、発表 10 分、講評５分とする。 5　大学教員による全体講評 **（１０分）**		

オ 実施上の留意点

・事前に研修で必要な資料の準備について事前に各校に連絡する。

・課題を出し、次の研修までに検討してもらうようお願いする。その際、各校に配布する課題シートを準備し、その観点に基づいた資料の作成をお願いする。

カ 研修の評価方法、評価結果

・開発した研修講座を実施する際に、評価・改善のためのデータを収集する。

・受講者の研修終了時のアンケート、グループ協議における受講者間の会話や行動を記録する。また、アンケートや記録を分析し、研修内容が効果的であったか、目指す力量が身に付いたかを明らかにし、開発した研修講座の内容を改善する。また、全ての研修終了後、総括的な評価を行い、専門家からの助言を受け、これらを基に各学校で活用可能なモデルを発信する。

キ 研修資料

講座「学校づくりとカリキュラム・マネジメント①」ワークシート

カリキュラム・マネジメントの視点での「グランドデザイン」分析

自校のグランドデザインもとに、自校の教育活動を、以下の視点で他校の先生に紹介します。15分間の発表準備の後、各校５分で発表します。発表に必要なメモがあれば、以下の枠を使ってください。

①「つける力」「目指す姿」の説明 ※できるだけ子どもの具体の姿で説明する
②児童生徒や地域の実態と「つける力」「目指す姿」のつながり ※「つける力」「目指す姿」を導き出した背景、実態についてふれて説明する
③「つける力」「目指す姿」と各活動の相互関係・一貫性 ※「つける力」「目指す姿」の具現のための手立て・教育活動がどのように各活動に位置付いているか説明する
④ＰＤＣＡの中の、特にＣやＡの仕組みについて ※手立てや教育活動の有効性をどのように検証するのか、検証結果をどのように改善につなげるのか説明する
⑤「つける力」「目指す姿」を具現するための枠組みや、地域や外部との連携の仕組みについて ※効果的な教育活動を展開するための枠組み（しくみ）づくりや、地域や外部人材の活用のしくみを説明する
⑥自校の教職員の方向性の共有をどのように図っているか。

自校のグランドデザインを、カリキュラム・マネジメントの視点で見つめ直したとき、どのようなよさがあり、どのような課題が見られるでしょうか

よさ	課題

講座「学校づくりとカリキュラム・マネジメント②」ワークシート

自校の現状分析と課題把握

学校名	生徒数 約　　名	教職員数 約　　名	氏　名

・学調の児童生徒質問紙の結果、学校評価アンケート、自分がとらえている自校の姿等から、強み、弱みを書き出しながら、自校の現状を分析します。

・他校の先生方からは、第三者としての目で自校の資料を見てもらい、強み、弱みと考えられる部分を教えてもらいます。

	強み	弱み
内部環境		
外部環境		

上記の強み、弱みと自校の「グランドデザイン」から、自校の児童生徒に「つける力」「目指す姿」を考えてみます。弱みからアプローチだけでなく、強みからのアプローチでも考えてみましょう。箇条書きでいくつかあげてみましょう。

講座「学校づくりとカリキュラム・マネジメント③」ワークシート

カリキュラム・マネジメント構想図	学校名	作成者

本校の現状	強み	弱み

育みたい資質・能力、目指す姿

具体的な取組

カリキュラム・マネジメント３つの側面から

教科横断的な視点からのアプローチ
※「総合的な学習の時間」「生活科」は中核となるので、可能な限りこの用紙位置付ける。

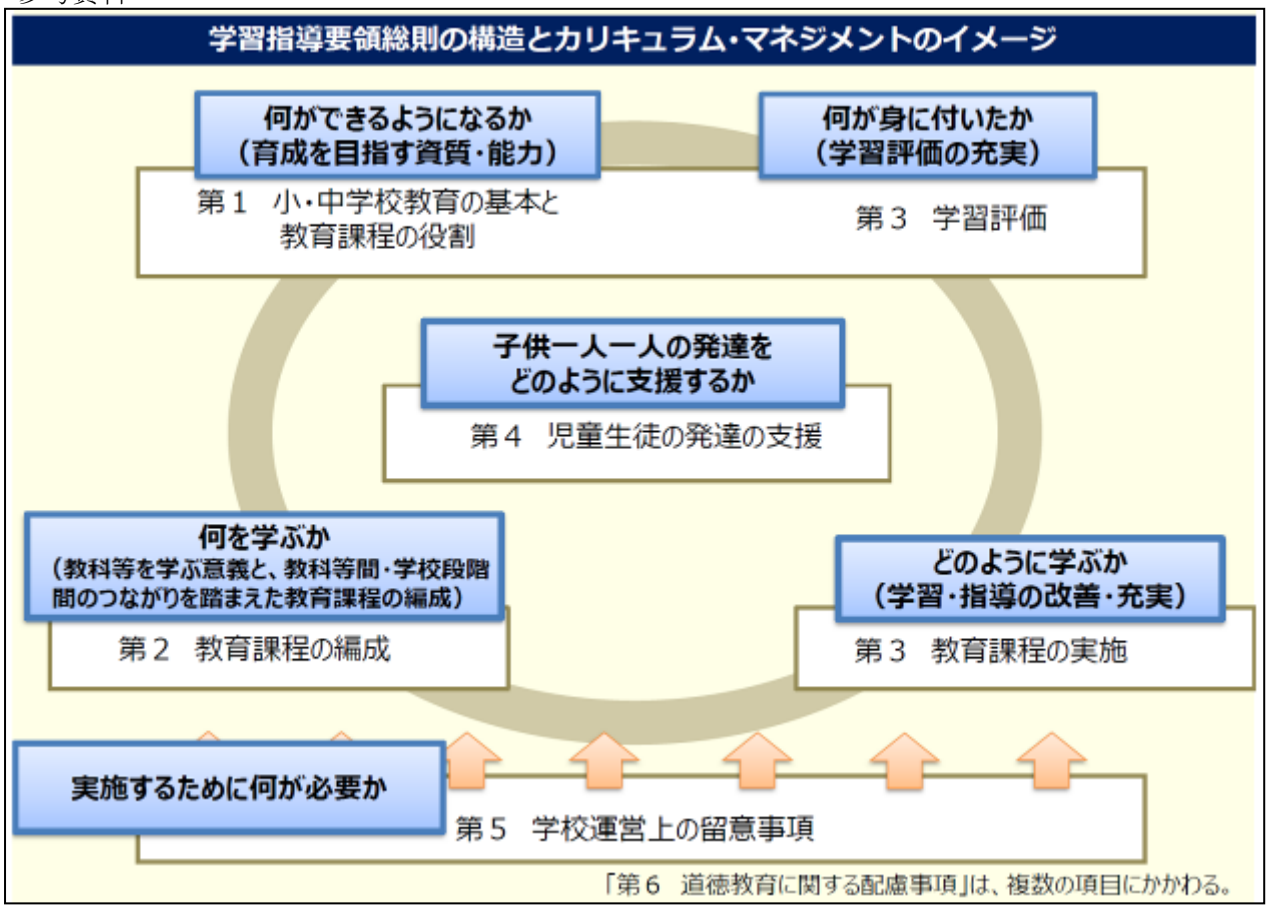
ＰＤＣＡサイクルの構築からのアプローチ
（特にＣとＡの仕組み作り）

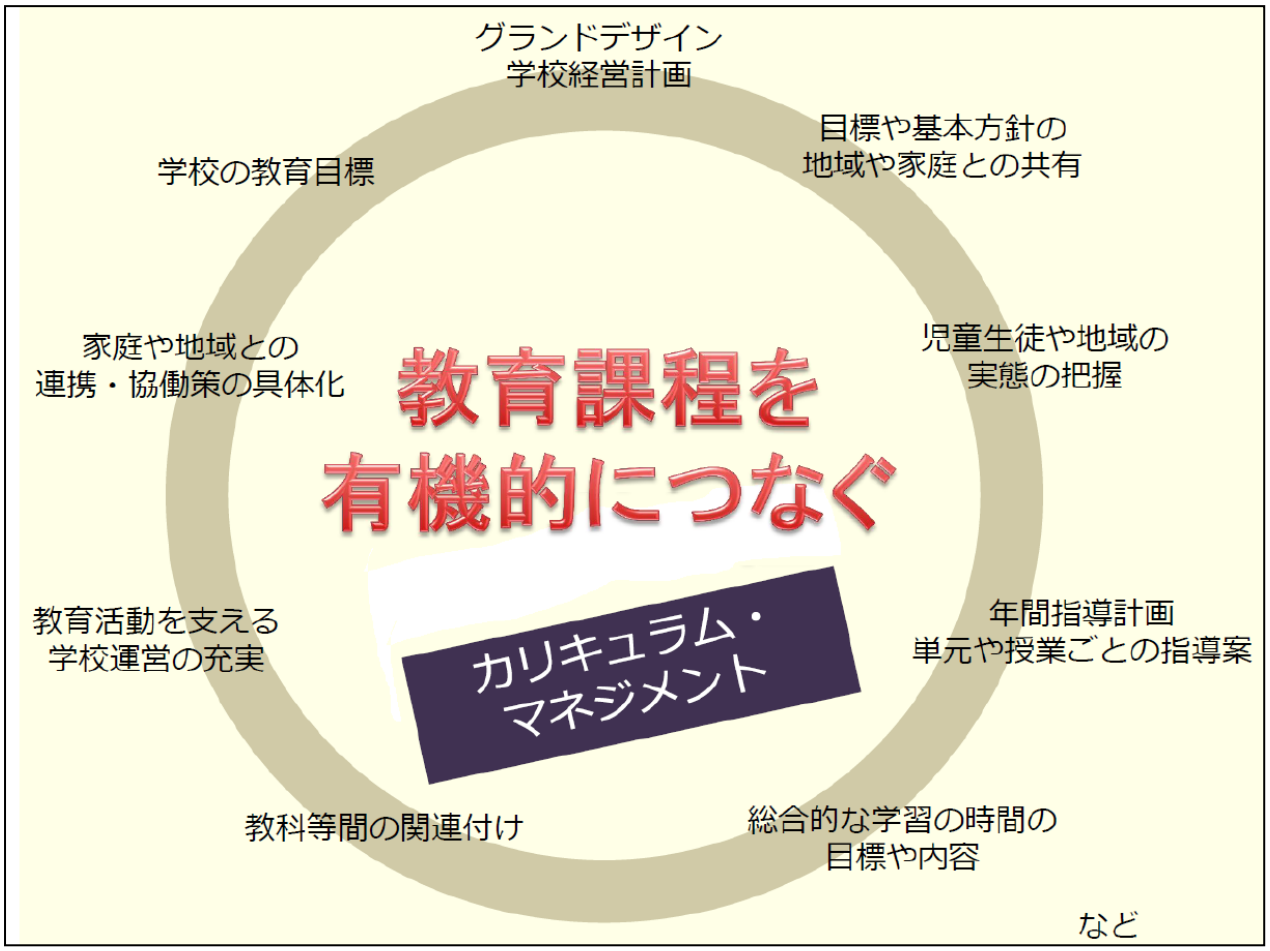
人的・物的資源等（地域等の外部の資源も含め）の効果的に活用、組み合わせの視点からのアプローチ

その他
上の３つに当てはまらないことがあればその他として位置付ける。

ここにあるように、付箋を色分けしながら使い、この用紙に貼ります。付箋同士をまとめたり、線でつないだりしながら、自由にレイアウトしてまとめてください。

参考資料


学習指導要領総則の構造とカリキュラム・マネジメントのイメージ
何ができるようになるか
（育成を目指す資質・能力）
第１　小・中学校教育の基本と
教育課程の役割
何が身に付いたか
（学習評価の充実）
第３　学習評価
子供一人一人の発達を
どのように支援するか
第４　児童生徒の発達の支援
何を学ぶか
（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階
間のつながりを踏まえた教育課程の編成）
第２　教育課程の編成
どのように学ぶか
（学習・指導の改善・充実）
第３　教育課程の実施
実施するために何が必要か
第５　学校運営上の留意事項
「第６　道徳教育に関する配慮事項」は、複数の項目にかかわる。


グランドデザイン
学校経営計画
学校の教育目標
目標や基本方針の
地域や家庭との共有
家庭や地域との
連携・協働策の具体化
児童生徒や地域の
実態の把握
教育課程を
有機的につなぐ
カリキュラム・
マネジメント
教育活動を支える
学校運営の充実
年間指導計画
単元や授業ごとの指導案
教科等間の関連付け
総合的な学習の時間の
目標や内容
など

②講座名「多様性が生きる学校づくりとカリキュラム・マネジメント
-学校教育目標の具現に向けて、意図的・計画的に進める異学年合同活動-」

ア 研修の背景やねらい

長野市では、人口減少や少子・高齢化が進む中、子どもにとって望ましい教育環境の在り方について検討した。そして、いずれの発達段階においても、多様な他者との協働学習や共同作業を通じて自己の考えを広げ深められるようにするために、ある程度の規模の集団で学び合える環境を整えていくことが課題であると考えた。

こうした課題に対して、市内の小規模の学校では、できる限り多くの人と関われるようにするため、異年齢交流や異学年合同授業を行うなど、様々な学び場を工夫して設定している様子が見られる。

異学年の児童生徒が合同で活動することは、集団の中での自分の立場や役割に気づき、集団にとって必要なことを考える力が付いたり、自ら行動する力が付いたりするなど、社会性を育てることも期待できる。

異学年合同活動については、小規模校に限らず多くの学校で行われている。しかし、単発的な活動になりがちで学校教育目標と関連させた意図的･計画的な取組となっていないため、そのよさが十分に生かされず､児童生徒が十分に力を付けることができない様子が見られる。

そこで、児童生徒が多様な他者との集団で学び合える環境づくりの一つとして、本市の教職員が異学年合同活動のよさを再確認し、学校教育目標の具現に向けて意図的・計画的に実施することができる資質・能力を養うことをねらい、本研修講座を開設する。

イ 対象、会場、講師

対象　小学校の教員

会場　長野市教育センター

講師　市指導主事・市内小学校教員

ウ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

まず、長野市の少子化の現状を把握し、長野市活力ある学校づくり検討委員会（2018）による「少子化に対応した子どもにとって望ましい教育環境の在り方について（審議まとめ）」をもとに、本市が目指す多様性のある教育環境の考え方について理解する。

次に、異学年合同活動について自校の実践を発表したり、他校の実践を聞いたりする。各実践について、「児童生徒にどのような力が付いたか」という観点で討議することを通して、多様な他者との学びの場としての異学年合同活動のよさを理解する。

そして、先進的な取組を行っている学校の実践発表を聞き、学校教育目標具現に向け、異学年合同活動を意図的・計画的に進める実際の様子を知る。

最後に、ワークシートで学校教育目標具現に向けた異学年合同活動の具体的な活動計画を立てる。それをもとに、今後の見通しを持てるよう、年間の教育活動の中に位置付けていくための視点を整理し、共有する。

エ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
講義１	20 分	長野市の少子化の現状と長野市が目指す多様性のある教育環境の考え方について理解する。	・内　容：長野市の少子化の現状を把握し、長野市活力ある学校づくり検討委員会（2018）による「少子化に対応した子どもにとって望ましい教育環境の在り方について（審議まとめ）」をもとに、本市が目指す多様性のある教育環境の考え方について理解する。 ・形　態：全体 ・使用教材：長野市活力ある学校づくり検討委員会（2018）「少子化に対応した子どもにとって望ましい教育環境の在り方（審議のまとめ）」 ・進め方：市教委指導主事がパワーポイント資料を用いて「少子化に対応した子どもの望ましい教育環境の在り方について（審議まとめ）」説明する。
演習１	30 分	多様な他者との学びの場としての異学年合同活動のよさを理解する。	・内　容：異学年合同活動について自校の実践を発表したり、他校の実践を聞いたりする。各実践について、「児童生徒にどのような力が付いたか」という観点で討議することを通して、多様な他者との学びの場としての異学年合同活動のよさを理解する。 ・形　態：グループ演習 ・使用教材：年間指導計画（全学年）・付箋（一人 5 枚）・ホワイトボード（グループ１枚） ・進め方：①自校で行った異学年合同活動を紹介し合う。 ②児童生徒に付いた力を付箋に書き出し、異学年合同活動のよさについて再確認する。 ③全体で情報共有する。
講義２	45 分	先進校の実践発表から、学校教育目標具現に向け、意図的・計画的に進める実際を知る。 実践発表校 ①長沼小学校（異学年交流）	・内　容：先進的な取組を行っている学校の実践発表を聞き、学校教育目標具現に向け、異学年合同活動を意図的・計画的に進める実際の様子を知る。 ・実　態：全体 ・使用教材（材料）：先進校の実践資料 ・進め方：内容や目的の異なる３校から発表してもらう。 ①長沼小学校…異学年交流 ②鍋屋田小学校…近隣校との異学年交流 ③大岡小学校…山間地校による複式教育 ・留意点：実践発表する学校へは、15 分間で①～⑤につ

		②鍋屋田小学校（近隣校との異学年交流） ③大岡小学校（複式教育）	いて発表の依頼をする。 ①実際の活動 ②活動のねらい ③学校教育目標とのつながり（グランドデザイン） ④成果（児童生徒に付いた力）と今後に向けて ⑤教師の活動案（意図的・計画的に進めるために具体的に行ったこと）
演習２	45分	具体的な計画を立て、年間計画に位置付ける視点を整理する。	・内　容：ワークシートで学校教育目標具現に向けた異学年合同活動の具体的な活動計画を立てる。それをもとに、今後の見通しをもてるよう、年間の教育活動の中に位置付けていくための視点を整理し、共有する。 ・形　態：グループ演習 ・使用教材：ワークシート（異学年合同活動　計画書） 年間指導計画 ・進め方：①ﾜｰｸｼｰﾄに異学年合同活動の計画を立てる。 ②立案した合同活動を年間計画に位置付ける。 ③年間計画に位置付けた意図を整理する。 ④全体で情報共有する。 ・留意点：演習のグループは、具体的な活動計画を立てやすいよう、可能な限り同じ学年の教員で構成する。

オ 実施上の留意点

・学校教育目標と活動のつながりや次学年と他学年の活動内容とのつながりを考えるため、自校のグランドデザインと各学年の年間指導計画を持参していただく。

・演習グループをできる限り同じ学年・同じ規模・同じ中学校区で構成する。

カ 研修の評価方法、評価結果

・研修終了時のアンケートを評価の一つとする。また、グループ演習時の会話の内容や取り組み状況も評価の一つとする。

キ その他

・本研修で計画した活動の実際について報告し、その成果と課題から、更に充実した活動にさせるための検討機会を設けたり、異学年合同活動での地域交流や異校種間交流など多様な活動について情報交換をしたりする講座を本研修の続きとして構築することも考えられる。

ワークシート

異学年合同活動　計画書

学校教育目標「　　」
（重点目標）

（　　）年生

付ける力（最終目標）

［　　］年生

付ける力（最終目標）

活動「　　」　全（　）時間

活動終了時の子どもの姿		時期	活動内容	教科・領域との関連 外部講師　他
（　）年生	［　］年生			

段階を踏んで、付ける力（最終目標）につながるよう記入する。

計画立案上の留意点：

(3)研修用ビデオ教材の作成について

①昨年度の取組

昨年度、長野市教育委員会は、長野市教育センター研究委員会（キャリア教育研究委員会、学力向上研究委員会、学校体育・学校保健研究委員会、活用問題検討委員会）を設置し、教育の願いや課題を分析し、学力向上や指導改善を図るための研究を進めた。そして、研究の進捗状況を広く周知し、成果を浸透させるとともに、教師の自己研修の意欲を喚起するために、教育課程に関わる公開授業を実施した。さらに、長野市全教職員が、各校の状況や自らのキャリアステージに応じた研修・研究計画に沿って、力量向上を目指す校内研修や自己研修、初任者研修等の集合研修で活用できるように、長野市教育センター研究委員会（学力向上研究委員会）の公開授業をもとに研修用ビデオ教材（国語、社会、算数、理科、外国語活動）を作成し、本年度の４月より長野市ポータルサイトに掲載した。なお、長野市ポータルサイトに掲載した研修用ビデオ教材の校内研修および自主研修における使用回数は、本年度末でおよそ 400 回となっている。

②本年度の取組

本年度は、昨年度までに設置していた長野市教育センター教育研究委員会（キャリア教育研究委員会、学力向上研究委員会、学校体育・学校保健研究委員会）に加えて、道徳教育研究委員会を新設した。各委員会では、長野市の教育の願いや課題を分析し、子どもたちの「知・徳・体」をバランスよく伸ばしていくという目標を具現するために、「カリキュラム・マネジメント」を通した「主体的・対話的で深い学び」の実現や学力向上や指導改善を図るための研究を推進し、各委員会で小学校１回、中学校１回の合計 16 回の公開授業及び研究会を実施した。公開授業及び研究会に参加した教職員は、校種間のつながりや教科横断的な視点、外部人材の活用を踏まえて単元を構成することの必要性や大切さを学ぶ機会となった。

本年度は、研修用ビデオ教材の拡充を図り、キャリア教育研究委員会、道徳教育研究委員会、外国語活動・英語部会の公開授業をもとに研修用ビデオ教材（公開授業動画、大学教員・校長・指導主事による授業コメント）を開発し、長野市ポータルサイトに掲載することを企画した。

研修用ビデオ教材を活用した研修を通して、カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図ることができる教員を育成する。

③研修用ビデオ教材を活用した校内研修・自主研修

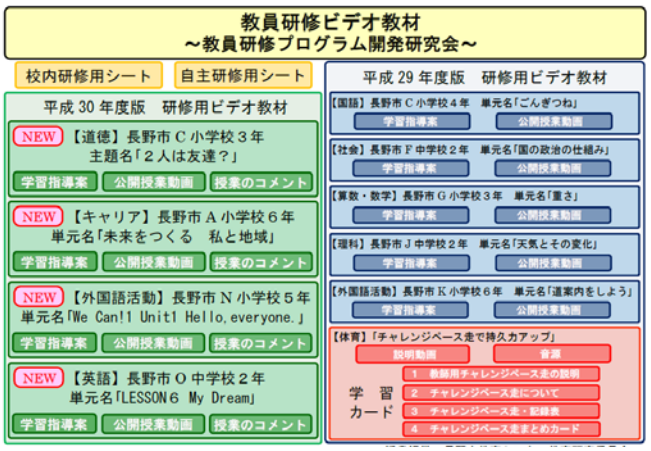
【校内研修編】

ア「長野市ポータルサイト」→「校務用ポータル」→「教員研修ビデオ教材」から校内研修を行う教科を決定する。

イ 学習指導案、校内研修用シート、授業のコメント（H30 年度版）を印刷する。

ウ 研究冊子『長野市の教育』を用意する。

エ 校内研修用シートの観点に沿って研修を進める。



〔観点〕

☆研修用ビデオを視聴する前に（10 分）

①. 指導改善の重点･方向を確認しましょう。

②. 単元展開を読み､単元の構想について工夫されていること・改善すること等、気付いたことを書きましょう。

☆研修用ビデオを視聴する（15 分）

③. 本時案を読み、研修用ビデオ教材を視聴して児童生徒の姿や教師の姿から気付いたことを書きましょう。

☆研修用ビデオを視聴した後で（20 分）

④. 授業のコメントを読み、A氏、B氏、C氏は、それぞれどのような視点で授業のコメントを述べているか書きましょう。

⑤. 観点②、③、④について、小グループで意見交換をしましょう。また、単元の構想を意識した授業改善について感じていることや心がけていることについて話し合いましょう。

⑥. 授業づくりにおける自分の「強み」と「弱み」を書き出し、研修を振り返りましょう。

【自主研修編】自主研修用シートの観点に沿って研修を行う。

平成 30 年度版　校内研修用シート

平成 30 年度長野市教育センター研究冊子『長野市の教育』と併用してお使いください。

研修ビデオ教材　教科＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿学校		
① 指導改善の重点・方向を確認しましょう。		
② 単元展開を読み、単元の構想について工夫されていること・改善すること等、気付いたことを書きましょう。		
③ 本時案を読み、研修用ビデオ教材を視聴したら、児童生徒の姿や教師の姿から気付いたことを書きましょう。		
④ 授業のコメントを読み、A氏、B氏、C氏は、それぞれどのような視点で授業のコメントを述べているか書きましょう。		
A氏	B氏	C氏
⑤ 観点②、③、④について、小グループになり意見交換をしましょう。また、単元の構想を意識した授業改善について感じていることや心がけていることについて話し合いましょう。		
⑥ 授業づくりにおける自分の「強み」と「弱み」を書き出し、研修を振り返りましょう。		

平成 30 年度版　自主研修用シート

平成 30 年度長野市教育センター研究冊子『長野市の教育』と併用してお使いください。

研修ビデオ教材　教科＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿学校		
① 指導改善の重点・方向を確認しましょう。		
② 単元展開を読み、単元の構想について工夫されていること・改善すること等、気付いたことを書きましょう。		
③ 本時案を読み、研修用ビデオ教材を視聴したら、児童生徒の姿や教師の姿から気付いたことを書きましょう。		
④ 授業のコメントを読み、A氏、B氏、C氏は、それぞれどのような視点で授業のコメントを述べているか書きましょう。		
A氏	B氏	C氏
⑤ 観点②、③、④を踏まえて、児童生徒の姿や教師の姿から学んだこと、単元の構想を意識した授業改善について感じていることや心がけていることを書きましょう。		

［資料］※授業ビデオについては、別途お問い合わせください。

(1) 研修用ビデオ教材　小学校６学年　総合的な学習の時間（キャリア教育）

単元名「未来をつくる　私と地域」

本時案

①本時の主眼

古い町並みを残しつつ､観光客や地域の人も楽しくにぎやかな町にしたいと願う子どもたちが、地域のためにできることは何かを考える場面で、地域と関わり貢献している方へ自分の思いを語り、話し合うことを通して、自分がどのように地域と関わっていきたいか、自己の思いを深めることができる。

②指導上の留意点

これまでの活動を振り返りやすいように、ホワイトボードや壁にこれまでの活動をまとめた模造紙等を掲示しておく。

③展開

	学習活動	・予想される児童の反応	○教師の支援　評価	時間
導入	1　本時の学習問題を確認し，見通しを持つ。	・今日は地域の方に来ていただけてうれしいな。どんなお話が聞けるか楽しみだな。 「地域に貢献している方たち」に思いを聞いてもらい，自分たちができることは何かを考えよう。	○これまでの活動を簡単に振り返りながら，本日のめあてを確認する。 ○話をお聞きしたい地域の方の所にイスを動かすように指示する。	5
展開	2　地域の方たちと話し合う。 3　話し合われたことを発表する。	・好きな物や名前をみんなでたくさん言ったから，楽しくなってきたな。 ・私は，これまで地域のことを調べてきて，古い町並みがこれからも残っていってほしいと思っていて，今の自分にできることは町をきれいにするゴミ拾いをしようと思っているんだけど，どう思うか聞いてみよう。 ・僕はメイン通り以外のお店もにぎわってほしいと思っているんだけど，観光客の人にそのことをどうやって伝えたらいいかお話を聞いてみたいな。 ・観光客や地域の人が笑顔で楽しくにぎやかになるには，まず地域の人とのあいさつをして仲を深めたいと思っているけど，どう思うか聞いてみたいな。 ・地域のことで知らないことがたくさんあって驚いたし，地域でこんな活動をしている人たちがいるんだと思ってすごいなと思いました。 ・前は観光客に知ってもらおうと思っていたけど，知らない人は地域や学校にもたくさんいるから，まずは身近な人から紹介してみたいと思いました。 ・まずは地域のことをもっと知って，自分のおすすめを言えるようになってみたいなと思いました。 ・やっぱりあいさつやゴミ拾いも地域のために大切だなと思いました。	○積木式自己紹介でアイスブレイクできるようにする。 ○自分の思い「地域の好きなところ」「調べて分かったこと」「願う地域の姿」「自分にできそうだと考えていること」「困っていること」を語り，地域の方にどう思うか尋ねることで，話が広がっていくようにする。 ○各グループを回り，話すことに抵抗があったりうまく話せなかったりする児童がいた場合，助言し，思いを語れるようにする。 ○各グループから代表で１名ずつ発表してもらい，全体で共有することができるようにする。 ○最後に箱山さんに本日の感想をお話ししていただき，子どもたちが，今後の活動により意欲を持つことができるようにする。 自分がどのように地域と関わっていきたいか，自己の思いを深めることができたか。 （話し合いの様子・感想発表・学習カードの感想から評価する）	２５ １０
終末	4　本時を振り返る。	・今日は話を聞いてもらったり聞いたりして，自分がやってみたいことが見えてきたぞ。 ・お話ができてよかったです。前よりも地域のために行動したい気持ちが出てきました。	○これからの自分がどのように地域にかかわっていきたいか，お話をして自分が変わったことは何かを書かせることで，今後の活動に見通しを持たせるようにする。	5

④ 授業のコメント

A氏のコメント　　“主体的な愛”に基づくキャリア教育

Ａ小学校６年生で行われた本授業は「地域のために何かできることをしてみたい」という子どもの願いのもとに実践されたものであった。そして、自分たちに何ができるのかを「地域に貢献している方たち」に聞いてもらう活動が本時である。学習指導案と 17 分間に編集されたビデオ映像から捉えられることは限られるが、その中で気づいた点を感想として述べたい。

> ただ私は、何とかして、学習の基盤に、この国土や社会に対する『愛』を据えつけておきたいと　思うのだ。『村を捨てる学力』ではなく『村を育てる学力』が育てたいのだ。みじめな村をさえも見捨てず、愛し、育て得るような、主体性を持った学力なら、進学や就職だってのり越えるだろうし、たとえ失敗したところで、一生をだいなしにするような生き方はしないだろうし、村におれば村で、町におれば町で、その生れがいを発揮してくれるにちがいない、と思うのだ（p. 23）。

これは、生活綴方教育の代表的な実践者でもある東井義雄が述べた言葉である。50 年代に書かれ

た著書ではあるが、現在の学力観に通じるものがあり改めて注目されている。ここで東井が述べているのは、“主体的な愛”に基づいて学ぶこと、そして、そのようにして育まれた“主体性を持った学力”は、人生を力強く歩む力へと繋がるということである。“主体的な愛”とは、「もの」を「人ごと」ではなく「自分のこと」として捉えることである。そして、主体性を持った学力は、「ものを、自分のものとしてかわいがり、育て、しらべていく、行動的な学習を通してのみ、育て得るもの（p. 32）」とも述べている。東井が示したこの考えは、まさに今のキャリア教育で求められている教育観・学力観に繋がるのではないだろうか。主体性を持った学力を培うためには、「人ごと」でなく「自分のこと」としていかに行動的に取り組むことができるのかが、まずカギとなるのである。

本授業に位置付けると、子どもたちと地域との関係から捉えることができる。子どもたちは活動を重ね、地域の人と言葉を交わすことを通して、地域に知らない店が沢山あることに気づいていく。そして、店員へのインタビューや地域の活性化に向けて取り組んでいる箱山さんと出会い、想いに触れる中で、改めて自分たちに何ができるのかを考え始めていくのである。たとえ自分が住んでいる地域であっても、思いをかけるような関わりがなければ、そこは単なる「近所」にすぎない。「人ごと」であった地域は、地域を知る活動を通して“主体的な愛”を伴う「自分のこと」として位置づいていく様子がみて取れる。

また、子どもたちが本授業を通して学び得たものは、地域に対する思いの深まりだけでない。例えば、「角居さんと話す中で、うんと好きなことを一生懸命にやるということがあって（略）それを意識して好きなことを一生懸命やって」、「箱山さんは自分の店だけでなく他のお店にもたくさんのお客さんが来てほしいと言っていてすごくいい人だなと思いました」と、地域の人の価値観に触れることで新たな価値観を得ており、授業で主眼としてねらわれた枠をこえて、生活に位置づく力として培われている。このように、地域の人との関わりは、子どもたちの“主体的な愛”を深め、“主体性を持った学力”へと導いてくれるものであるが、そこで忘れてはならないのは、教師自身の“主体的な愛”であろう。キャリア教育として捉えると教師自身も教師というキャリアを生きる一人の大人として存在している。教師自身が「人ごと」でも「子どものこと」でも「教師のこと」でもなく「自分のこと」として対象を捉えることも必要ではないだろうか（安達、2018）。

（引用・参考文献）

・安達仁美（2018）「『もの』から『こと』へと変容する子ども・教師・地域の学び」信濃教育会『信濃教育』9 月号、pp. 6-15。
・東井義雄（1972）『東井義雄著作集 1　村を育てる学力』明治図書出版。

Ｂ氏のコメント　　～主体的な学びと人とのつながり～

授業者は、これまでの総合的な学習の時間を「教師に言われるままに子どもたちが活動をするだけになることが多い。」と振り返り、今年度は連続的に「子どもたちが決めたテーマを達成する」単元展開を仕組んだ。本時は、前小単元「地域のお店の人にインタビューしよう」から続く、小単元「自分たちにできることは何か考えよう」の一コマ。授業には、布団屋さん店主、ゲストハウスオーナー、まちづくりを進めている方など、学校近隣の６名の方々をお招きし、子どもたちはそれぞれの思いを聞いてもらった。Ａくんが「城山のよさを伝えるためにパンフレットを作りたい。ど

んなことを呼びかければ城山に来てもらえるか。」と尋ねると、「パンフレットはなかなか手に取ってもらえない。立体的にするなど、何か工夫があるといい。まずはどんなパンフレットがあるか調べてみるといい。」とアドバイスをもらった。また、Ｂさんは宿主さんの話を聞いて「〇〇さんの宿はみんなから愛されていて、作った地図を見た人が知り合いに言ってつながっていって、どんどん広まっていることが分かった。」と述べ、人とのつながりを実感している。映像でもわかるように、子どもたちは地域の方の話を身を乗り出して聴いている。そして、いただいたアドバイスから、次の一歩をどう踏み出したらよいかをつかむことができた。これらは、子どもたちの知りたい、聞きたい、明らかにしたいという思いから単元を展開した結果である。人から言われたことをやるのではない。子どもたちは、自分でやりたいことをやっているのである。まさしく主体的な学びである。これからの社会で求められる「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断して行動し、その課題をよりよく解決していける力」である。また、本事例では地域や大人とつながることで学びを広げ、人とつながることの大切さに子どもたちは気づき始めている。さらに、地域や社会をよりよくしていこうとする気持ちを高め、中にはそれを自らの行動に表す子どもも出てきたとのこと。これらの学びはきっと彼らのキャリアとなり、社会へ巣立つときの源の力になると確信している。

Ｃ氏のコメント

Ａ小学校は、キャリア教育の視点をもとに、一年間の活動を子どもの願いを大切にして、カリキュラムを編成し、授業を実践してきていることが単元展開から読みとれる。また、地域の「ひと、もの、こと」とのつながりを単元の中に位置付け、特に、地域の大人（長野びんずる実行委員会の方、地域のお店の方、地域で活躍している方）と触れ合い、交流する機会を子どもの願いにあわせて計画的に位置付けて、充実させている。

本時の子どもの姿から、一人一人が地域への愛着や地域への想いをきちんと持ち、自分の考えを地域の大人に語り、地域の方のアドバイスを自分の次の活動に生かそうと対話をしている姿がみられる。地域の大人との交流により、多様な他者の考えや立場を理解し、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ、他者と協力・共同して社会に参画しようとしている。今後の社会を積極的に形成すことができる力である「人間関係形成・社会形成能力」が着実に培われていることが分かる。

また、カリキュラムの１つ１つの活動を子どもの願いからスタートして計画し、実行し、振り返り、新たな課題や活動を見いだすという一連の流れ（ＰＤＣＡ）を大切にしてきていることから、本時、自分の考えをもとにして、地域の方からいただいたアドバイスを参考にしながら、地域のよさや課題に気付くだけではなく、地域のために今の自分ができることを考え、計画し、実際にゴミ拾いやリノベーションのお手伝い等、子どもたち一人一人が、今の自分にできる活動を計画、実行していくことで、「課題対応能力」も培われてきている。

Ａ小学校の取組は、今後の各校のキャリア教育の参考となる取組である。しかしながら、このＡ小学校で学んできた６年生の学びが中学校の学びへとどのように具体的に接続していくのか、この学びを生かした中学校でのカリキュラムの構築が今後の課題として考えられる。

(2) 研修用ビデオ教材　小学校３学年　道徳　主題名「二人は友達？」

本時案

①本時の主眼

より深く友達と関わろうとする姿が見られるようになってきた子どもたちが、「赤おにと青おには友達か。それはなぜか」を考える場面で、赤おにと青おにの関係性の変化や、自分のことを思ってくれている友達は、自分の周りにもいないだろうかと話し合ったりすることを通して、お互いのことを考えることの大切さに気付き、友達のことを心から思いやり、支え合って生活していこうとする心情や判断力、実践意欲と態度を育む。

②指導上の留意点

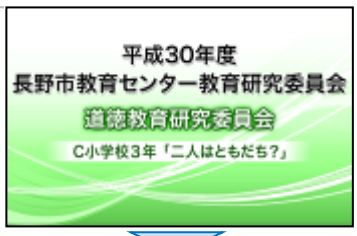
・資料はあらかじめ読んでおくようにする。

・自分の考えがまとまらない児童が多く出た場合は、互いに意見を聞き合う時間を設ける。

③展開

段階	○学習活動　・予想される児童の反応	・指導	時間
導入	○「友達」とは何か考える。 ・一緒に遊ぶ。 ・その友達のために何かしてあげる。 ・大切に思う。 ○赤おにと青おには「友達」かどうか，考えながら資料を読む。	・一緒に○○する，友達のために○○する，思いやるなど，行動や内面について観点を示して考えることができるようにする。 ・「赤おにと青おには友達かどうか考えながら読みましょう」というように観点をもって資料を読むようにする。	7 分
展開	**赤おにと青おには友だちか。それはなぜか。**		28 分
	・友達。お互いを思いやっているから。 ・青おには，赤おにのために（人間と仲よくなれるように）できることをやっている。 ・青おにからの一方通行で，何だかかわいそう。 ・最後に青おにがいなくなって，赤おには凄く悲しがった。 ・赤おには青おにに向かって何も行動してはいないけど，青おにを思っている力が最後は大きくなっている。お互いが釣り合っている。	・教師が資料を読む。 ・子どもたちの思考を深めるため，子どもの言葉を使って問い返しをする ［問い返しの例］ ・「お互いを思いやっている」って，もう少し詳しく言って下さい。 ・似ている考えの人，もう少し説明して下さい。 ・頑張ったのは，青おにだけではないのですか？ ・はじめと終末時（赤おにがないた時点）の二人の関係性の変化が捉えることができるようにする。	
	【心情】友達のことを心から思いやる心をもって，友達の願いをかなえようと　精一杯尽くした人の心や行為に触れて，感動する。		
	そういう（自分のことを思ってくれている）友だちは，自分の周りにもいないだろうか。		
	【判断力】友達の願いをかなえたいと思う心や，友達のために精一杯行動しようとする心を，自分(達)も持っていることが分かる。 【心情】友達のことを心から思いやる心を持って，友達の願いをかなえようと精一杯尽くした人の心や行為に触れて，感動する。		
	そういう（自分も相手も互いに思っている）友達が１人，２人と増えていったら，どうなっていくだろうか。		
	・言いたいことが言える。 ・悪口が減る。 ・できることが増える。 ・互いが，楽しくできる。 ・ケンカしてももっと仲よくなる。	・「そういう友達が一人，二人，三人…と増えたら…」，の「…」の部分を考えるようにする。 ・本時の学習が自分達のよりよい生き方につながるという展望をもてるようにし，授業後の生活の意欲を高める。	
	【評価】　友達のことを心から思いやり，支え合って生活していこうとする気持ちを育んでいる。（発言やノートから）		
終末	○本時のまとめをする。 ・さらによい友達になっていくために大切なこと，今日の学習で大切なことをノートにまとめる。	・本時の学習を言葉で表すことで，何を学んだのか自己評価し，学習の成果を子ども自身に返す。	10 分

※太字【心情】，【判断力】は，学習活動を仕組んだ意図。



④授業のコメント

Ａ氏のコメント

「考えて議論する道徳」、すなわち「考える」ということは、主体的に自分とのかかわりで考え、自分の考えを明確にすること。「議論する」とは、多様な考え方・感じ方を知り交流することです。しかし、発問過多は、教師主導の授業となり、子どもの思考転移力を低下させることにつながります。さらに特定の価値観を押し付けたり、望ましいと思われること・決まりきったことなど言わせたり書かせたり誘導することにつながりかねません。

本時では、「友達とは何か」という考えの幅が広がるテーマを念頭に、「二人は友達か」という本時の目標へ向かう発問を投げかけています。この中心発問は、授業のねらいに迫るための核のようなものなので、しっかり教材研究を行い、十分に練ることが大切です。余計なものはそぎ落とし、できるだけシンプルに考えることが大切です。

授業で見られるように、道徳的な議論を深化・拡大させるためには、２つの要素が必要となります。１つ目は道徳的問題が含まれている教材かどうかです。その問題に直面することで、道徳的諸価値を理解し、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自分の生き方を考えることにつながるからです。本時の「泣いた赤鬼」は古くからある道徳教材であり、多くの教員に親しまれています。今後、考えて議論する道徳授業を展開するうえで、さらなる子どもたちのリアリティを彷彿させる教材開発に力を注ぐことが肝要です。

２つ目は、子ども個々にじっくり考える時間（耕しタイム）を確保してあげることです。自分の考えが耕せると、子どもの頭の中に「言いたくてしょうがないこと」や「もやもや感」が漂ってきます。そうなったらしめたものです。子どもはアウトプットしたくなってしょうがなくなります。本時の最後の部分で、参観中の先生方にプレゼンできたことも、「耕しタイム」があってからこそです。

話し合いが活発となる土台として、「授業の空気感」に気配りすることです。これは道徳に限らず、どの授業にも言えることですが、堅苦しい感じでは話し合いが活発に進みません。そこに流れる空気の柔らかさ、「どのような考えを述べてもいいんだよ」という保障、心が開かれた状態、このような安心感があってこそ話し合いは成り立つのです。

さて、道徳的判断力や心情・実践意欲は、他者の意見を聞き話し合うことによって、自分の考えが更新することがよくあります。また、例え意見が合わなくても、留保条件を提示して何とか合意形成したり、一部あゆみよったり、あるいは双方で第３の新たな考えを共に創り出したりすることもあります。話し合いによって価値の違いに気づき、自分の考えを更新できる授業。「押し付け道徳」では到達できません。本時の授業を参考にして、取り入れたいところは取り入れ、改善したいところは自分流に改善していく、そんな素敵な道徳授業を実践してみてください。

Ｂ氏のコメント

青おにの行為の妥当性について話し合う場面で、Ａさんが、「迷ってる。赤おにが人間と友達になれたのはいいけど、青おには赤おにと友達なのに、遠くへ行っちゃった・・・。」授業者は、二人の関係を図式化して、子どもたちの意見をまとめながら、「これって、友達？みんな最初に言ってたじゃん。一緒にいるのが友達だって。」と問い返す。子どもたちが、自分が思っている「友達」について、多面的・多角的に考え直すきっかけとなった。そして、板書で赤おにと青おにの関係を

矢印や線の幅で可視化し、その関係性が自分の身の周りにもあることに気づいていった子どもたちであった。「友達線が、びゅーんと長くなっていったら、そういう友達が二人、三人と増えていったら・・・・。」その後に続く言葉を、我先にと黒板に書く子どもたちの姿から、よい友達関係を築くことのよさを十分に感じとったことがわかった授業であった。終末で、この授業で思った事、感じた事などを、参観者の先生方に、熱心に語る子どもたちの姿から、「今日、道徳で学んで良かった。」という気持ちが滲み出ていた。
道徳の授業の中では、児童の発言をただ取り上げるのではなく、「それは、どういうこと？」「〇〇さんの言っていることわかる?」「〇〇さんと似ている考えの人いる？」「続けて言ってくれる人いる？」など、授業者が意図的に問い返しながらつなげていくことが大事である。そうすることにより、発言した児童は自分の思いを考え直したり、聞いている児童は異なった考えが存在することに意識を向けたりすることにつながる。この学級の子どもたちは、自然に自分の思いを友達と相談したり、黒板に書いたりすることができる。これは、一朝一夕でできるものではなく、担任が、道徳を含めた日頃の授業や生活の中で、より良い友達関係づくりをしてきた結果である。いずれにしても、「考える道徳」、「議論する道徳」への質的変換を図る授業の在り方として、参考になる授業である。

Ｃ氏のコメント

道徳教育研究委員会では、「『考える道徳』、『議論する道徳』への質的転換を図る授業のあり方」を研究の柱とし、授業実践に取り組んできた。本授業では、子どもたちが学びを深めていくために、以下のような「教師の工夫」が見られた。
◇工夫①「端的な導入…授業者は、子どもたちに「『友達』って何？」と問いかけ、友達についての子どもの発言をまとめた後、本時の学習のめあてを提示した。子どもたちが「本時、何について学ぶのか？」をしっかりと意識できる導入になった。
◇工夫②「教材文の扱い」…子どもたちは、事前に教材文（「泣いた赤おに」）を読んでいたことで、時間がとられがちな「内容理解　→　道徳的な問題の把握」の場面もスムーズに進めることができた。また、資料を読む際、「二人は友達かどうか、考えながら読んでください。」と、子どもたちに読む際の視点を与える工夫も参考になった。
◇工夫③「議論する場づくり」…「赤おにと青おには友だちか？」について、自分の考えを記入した後、友と自由に話し合う「相談タイム」が位置付けられていた。子どもたちは、席を立ち、二人の関係について、自分の考えを伝え合う姿が見られた。「特別の教科　道徳」でも、「日々の授業の積み重ね」が大切であることを実感させられた。
◇工夫④「子どもが考えるための板書」…授業者が赤オニと青オニの関係について、実際の距離と心の距離を線に表し視覚化したことで、子どもたちは「離れていても、心はしっかりとつながっている友だち」ということに気付くことができた。
◇工夫⑤「子どもの発言に対する教師の問い返し」…子どもたちの発言に対して、授業者は「それってどういうこと？」などと問いかける姿があった。これは、子どもたちが自分自身の考えをより

明確にしていく上でも有効な取組だと言える。

今後さらに研究を積み重ね、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習」の中で、子どもたちが道徳的価値や人間としての自己の生き方についてお互いに議論しながら自覚を深めていくことができる、そのような授業実践を追究していく必要がある。

(3) 研修用ビデオ教材　小学校５学年　外国語活動

単元名「３年生と English Party をしよう！（We Can!1 Unit1　Hello、 everyone.）」

本時案

①本時の主眼

１学期に好きなことを伝えたり尋ねたりする表現を学んだ児童が、ALT やペアの友だちの好きなものを予想して尋ねる場面で、チャンツで表現に慣れ親しんだり、コミュニケーションモデルを見たりすることを通して、What ～do you like?や I like～.の表現を用いて質問したり答えたりすることができる。

②展開

	学習活動 （時間）	◇教師の発問 ・予想される児童の反応	・指導　評価	教材
はじめ	1 Greeting(1) 2 Let's Sing(3) 3 Let's Talk(5) （Small Talk） <30seconds challenge> 4 【Let's Watch and Think1】(8)	Hello, everyone.　・Hello! How are you?　・I'm fine./ good. ABC Song♪ Please clap your hands, when you hear the alphabet in your name. ・元気に歌うたろう。 My name is Akiko. A-K-I-K-O. (I have) 2 K and 1A, I, and O. How do you spell your name? Let's talk about your name. 指導者と ALT の話を聞く。 （About Olympic Games） Do you know her.? ・石川佳純は卓球選手だね。 Let's watch and think famous Japanese in the world. What did you hear? ・Father mother sister家族のことかな ・パラリンピックって聞こえたよ。	・名前に含まれているアルファベットの時は、手をたたく ・振り返りカードに書いてあるアルファベットの名前を確認させる。 ・石川佳純と谷真海の２人取り上げて話をする。 ・映像を見て分かったことを発表させる。	LT1 U5 振り返りカード ピクチャーカード
なか	5 Today's Goal の確認(2)	Today's Goal　バンビー先生や友だちが好きなものを調べよう！ ◇好きなことを伝える表現はどんなものがあったかな？ ・I like とか ・Do you like～? Yes, I do. / No, I don't. ・Tシャツ作ったときに What color do you like?で聞いたね。 Today's Point　What ～ do you like?でたずねよう！ I like～.で答えよう！	・これまで学習してきた単元を思い出させる。	振り返りカード
	6 Let's Chant(3) 7 【Let's Play1】(9) 8 【Let's Play2】(9)	What do you like? ALT が指導者に好きなものを尋ねる。 ALT の好きなものを予想する。 What color do you like? What food do you like? What TV programs do you like? What sports do you like? I like～.　→　You like ～. First, please write your answer. Next, can you guess about your pair? A:What color (food/ TV programs/ sports) do you like? B: I like blue.　A: Oh, me too. ◇友だちの好きな物を予想して尋ね合い、表に書こう。	・色、食べ物、動物を１回ずつやってみる。 ◎好きなものを予想して聞き取っている。 ＜行動観察、記述分析、振り返りカード＞ ・停滞しているペアには声掛けをする。 ◎ What do you like? や I like～.の表現を用いてやり取りできているか。 ＜行動観察、記述分析、振り返りカード＞	HF1L5 WC1 U1 P4
おわり	9 授業を振り返り、カードに記入する。(4) 10 Greeting(1)	Please write reflection sheet. Today' Goal and Point is ～. Let's finish English class. Thank you. See you.	・ＴＧとＴＰを振り返り、カードに記入させる。	振り返りカード

Ａ氏のコメント

Ｋ小学校の実践の良い所は、文部科学省で作成・配布されている指導案を活用しながら、児童の実態に合わせて、指導案を修正しているところである。外国語活動と外国語科の大きな違いは、前者がモデルを見て真似をしてやってみるという学習のプロセスが前提になっていたのに対して、後者では、モデルを真似するのではなく、他の人の英語使用を見ながら、自分で取り入れられる語句や表現に気付けばそれらを活用したり、他の人の伝え方や内容の整理の仕方の中でコミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じていて優れているものを自らも取り入れたりするといった学びが基本となる。Ｋ小学校の実践の中では、教師の英語を聞く、友だちと話す、We Can!の英語を聞く、また友だちと話をするというように、学んでは試し、試しては学ぶといった授業構成になっている点が参考になる。また、Let’s Listen で予想しながら（つまり、思考力を働かせながら）目的意識を持って聞かせている点もよい。

Ｋ小学校の実践の課題としては、授業者が ALT が英語を用いて児童に自分の気持ちや考えを伝えることが持つとあると良いと思う。

Ｂ氏のコメント

授業者は、今年度から配置された小学校英語専科教員です。本時は、英語専科として普段行われている日常の授業です。

授業の中で、子どもたちが自然と英語に聞き入ったり、自然と英語を口に出す場面を作り出しているのが素晴らしいと思います。例えば、授業の冒頭すぐに、いつものようにペアでの対話活動。子どもたちは、考えながら自分の好きなものなどを話し、受ける側は、確認しながら聞いています。お互い理解し合うコミュニケーションがうまく成立しています。

また、ＡＬＴと子どもたちのやり取りも、そうです。ビデオ教材の内容をＡＬＴと英語でやり取りをしながら確認しています。石川選手がオリンピックで銅メダルをとったという場面では、ＡＬＴが、金メダルを示すと、”gold”、銀メダルには、”silver”、そして銅メダルには、”bronz”という言葉が、子どもたちの口をついて出ています。そして、ＡＬＴがその”bronz medal”を授業者の首にかけると、なんと自然発生的に大きな拍手が起きています。

さらに、ＡＬＴの好きな色を予想を立てて聞く場面では、授業者が英語で言った色に、子どもたちは手を挙げていきますが、最後に先生が、”Any other color?”と聞くと、すぐに”black”と応えている子どももいました。そして子どもたちは、一斉に”What color do you like?”と言うと、ＡＬＴの答えを期待するようにじーっと集中して聞き入ります。しばらく間があって”blue and green”の答えをもらうと歓声があがりました。

つい”Listen to me.”や”Repeat after me.”で子どもたちに英語を聞かせたり、英語を言わせたりする練習をしてしまいがちですが、指導の工夫をして、子どもたちが自然と英語に聞き入ったり、つい英語を口に出す場面を作り出していきたいものです。

Ｃ氏のコメント

本授業は、文部科学省から配布され、ポータルサイトにも掲載してある学習指導案例をもとにして、Unit GoalやToday’s Goal、Today’s Pointをアレンジして、授業構想したものです。

Unit Goalを子どもにとって魅力的なものにし、そこに向かうための単元展開を考えることが、「主体的・対話的で深い学び」につながる大切なポイントとなります。

【Unit Goalについて】

授業構想をするうえで、まず、Unitの出口において、どんな子どもの姿を教師は願うのか、を具体的な場面においてあらかじめイメージすることが大切です。本単元では、３年生との交流場面を設定し、自己紹介しあうことを構想しています。３年生のLet’s Try!１でも同時期に「Hello!」というUnitがあり、挨拶をしあう活動がありますので、それぞれの使える言語材料を用いて伝え合うことは、外国語（活動）の目標（３）にある「他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」場面として大変意義のあることです。

【英語専科教員の授業について】

英語専科教員が配置されている学校については、主に英語専科教員が授業を進めていると思います。本時も同様に進めていますが、担任の先生は支援の必要な児童に寄り添い、児童の実態に応じて、担任の先生にしかできない個別支援をしています。また、ＡＬＴは、ビデオ映像の内容について、具体物を用いながら児童に分かる英語で伝えたり、モデル提示をしたりして母語話者として授業者を支えています。このように、チームで授業をすることで、子どもにとっては一層丁寧な支援を受けられるようになり、結果として一人一人に着実に力を付けることにつながります。

まとめると、次のようになります。

①授業者が、ゴールイメージを明確に持つ。

②姉妹学級との交流場面を位置付けるなど、児童の意識にあったダイナミックな授業展開を構想する。

③指導チームをつくり、個を支えながら集団を作る。

(4) 研修用ビデオ教材　中学校２学年　外国語（英語）　単元名「LESSON6　My Dream」

本時案

①本時の主眼

自分の夢について会話する場面で、対話に必要な英語を確認したり、会話の様子を評価してもらったりすることを通して、英語で質問や相づち、確認をしながら会話を続けることができる。

②指導上の留意点

会話のグループ（３人）を組むにあたり、人間関係や能力差に配慮する。

③展開

段階	学習活動	予想される生徒の反応	◇教師の指導・援助　評価	時間	備考
導入	1　教師が示す２つのモデルを比べて、よいところを見つける。	ア　最初のモデルはたくさん止まってしまうけど、相手の言ったことに反応しないからかな。 イ　質問をたくさんすると、話すことも増える。 ウ　聞き取れなかったところは、もう一度言ってもらえばいい。	◇教師が My Dream についての会話の２種類のモデルを示す。 ◇２つのモデルを比べて気づいたことを問う。 ◇生徒の考えを取り上げ、Today's Goal を設定する。	10分	モデル
		Today's Goal：相手の言葉に反応して、会話を続けよう。			
／展	2　会話を続けるために必要なことを確認する。	エ　Where?や When? など簡単な単語だけでも質問になる。 オ　反応をきちんとすれば対話も続きやすい。 カ　自分も相手も、言いたいことをちゃんと伝えることが必要だ。	◇Today's Pointを生徒から引き出し、提示する。これまでの授業で会話した時の様子を思い出させる。 ①質問（疑問詞を挙げさせる） ②相づち ③確認（聞き返しや繰り返し）	5分	
	3　グループで My Dream について会話する。一方のグループは、評価シートの内容を伝える。グループの役割を変える。	キ　伝えたいことは伝えたけど、実際に会話を続けるのは難しい。 ク　相手の資料にもっと注目し、気になるところを質問すればいい。 ケ　続けるためには、とにかく話題を切らさないことかな。	◇グループで、 My Dreamについてマッピングをもとに２分間会話するように促す。 ◇もう一方のグループは評価シートに会話の様子を記入するように、指示する。 ◇グループごとの役割を変えて、会話と評価をする。	12分	メモ 評価シート
	4　評価を確認し、次の会話の課題を決める。	コ　気になることを聞いたり、相手の言ったことに自分の感想を伝えたりしよう。	◇評価シートを交換し、自己の課題を確かめ、次の会話に取り入れたいことを書くように促す。	3分	
開	5　もう一度会話をし、評価をする。	What is your dream? ***I want to go to the USA.*** Why? ***I like watching Major League.*** Good. Do you like baseball? ***Yes.*** Me too. What food do you eat? ***I want to eat hamburger.*** Hamburger! It's delicious. ***How about you? What is your dream?*** I want to be a nurse. ***Really? Why?*** I want to help sick people. ***Good.*** I went to a nursing home at day-at-work program. ***Oh, yes!*** I enjoyed talking with people. I helped them too. I learned a lot. ***Wow. That's nice.***	◇再度会話をし、評価するように指示する。 英語で質問や相づち、確認をしながら会話を続けることができる ←※実際は３人で会話する	12分	
／終末	6　本時の振り返りをする。	サ　相手の話にできるだけ反応するようにした。つぶやきも英語でできたらいいと思う。 シ　実際に使うのは難しい。繰り返し練習することが必要だと思った。	◇Today's Goal や Today's Point を意識しながら、会話を続けることができたか振り返るように促す。 ◇次の目標をもてる生徒の発言も取り上げ、全体に返す。	8分	

④授業のコメント

Ａ氏のコメント

Ｏ中学校の実践の良い所は、次の２点である。まず、繰り返す、相槌を打つ、質問をするといった会話の継続（コミュニケーション方略）の仕方に焦点をあてて、繰り返し話す機会を設定したこ

とである。これらの技能を運用できるようになるためには、繰り返し同じような言語活動を行う必要がある。第２に、want to だけでなく、「既習の表現を用いて」自分の夢について語り合う活動を設定したことである。単元計画によれば、最初の授業において、want to の使い方を理解したり、練習したりする学習活動が設定させているが、後半では want to にこだわらず、それ以外の表現を使うことを促すような単元計画になっている。次期学習指導要領の目標では、「知識及び技能」に関わる資質・能力として、文法を理解したり、それを聞いたり話したりすることができるようになることが重要である。同時に、「思考力、判断力、表現力等」に関わる資質・能力の点からは、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、既習の文法等を活用して、言語活動を行うことが重要になる。「知識及び技能」としては、to 不定詞の使い方を理解し使えることになることは重要であるが、それが自由自在にコミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて用いることができるかというとそうではない。例えば、ペアで話している男子生徒が、What is your dream? と尋ねられた後、I want to go to Tokyo. と答えている。want to という表現を用いることができたと判断しても良いが、I see. という受け答えの後に、I want to go… . Two years ago. Tokyo Olympic. Yeah. と述べている様子を見ると、本来は I want to go to Tokyo. We will have Tokyo Olympic games two years later. というような未来を表す表現については、自在に使えるようになっていない。この生徒の場合、want to という表現を自在に使えるようになっているのではなく、単元で焦点があてられ、練習をしてきたために活用できているという状態であると判断できる。本当の力になるためには、既習の表現を活用して言語活動を行うような実践がこれから求められる。

Ｏ中学校の実践の課題として２点指摘できる。第１に、「書くこと」→「話すこと」という流れで単元計画を行っているが、即興的に言語使用をすることを考えると、「話すこと」→「書くこと」という流れで単元計画をすることが重要である。第２に、せっかく授業者や ALT が自分の夢について語っているのに、授業者や ALT の気持ちや考えを理解するのではなく、話し方などの表面的なところにポイントをあてたところである。授業者が New York に行きたいという夢を語った時に、「まだ行ったことがないんだ」とか「私も同じように New York に行ってみたい」などという感想を持てるようなやり取りを行えると良いと考える。

Ｂ氏のコメント

授業者は、子どもたちが型にはまった英語ではなく、自ら主体的に対話ができるようになることを願っています。英語で話すことは好きで、話せるようになりたいと思っていても、英語に苦手意識を持っている子どもたちがたくさんいます。授業者は、そんな子どもたちに、英語で会話することの楽しさを味わわせ、できるという自信を持たせたいと考えております。

そんな子どもたちに、会話活動を仕組んでいきますが、この授業で素晴らしいなと思ったのは、単元を通してねらいがはっきりしていること、そしてその手立ても単元を通したものを持っていることです。単元を通して繰り返しテーマにそって会話をすることを積み重ねています。「興味がある職業について」「学校に行く目的について」「好きな食べ物について」「行きたい場所について」「好きなものについて」そして、「My Dream について」のテーマで会話を繰り返してきました。さらにその会話を主体的な、また自然な対話にするため、相づちや質問、確認などに心がけるよう配慮し、会話を積み重ねています。

本時、子どもたちの会話では、次のような対話が聞かれました。（My dream について、A、B、C、３人の会話）

A: What is your dream?
B: I want to go to Tokyo.
A、C: Me too.
C: Why?
B: I want to go to Akihabara.
C: Akihabara! Oh. What do you buy in Akihabara?
B: I buy?
C: I will buy….
B: I will buy anime goods.
C: Anime goods.
A: Me too.
C: Nice. You like Anime.
B: Yes. What is your dream?
A: I want to go to Tokyo.
B、C: Me、 too.
C: Why?
A: I want …. I will go shopping.
C: Shopping.
B: Ohm、 me too.
A: To animate.
B、C: Me too.
B: Nice.
A: Collabo Café?
C: Oh.
A: I like go to Collabo Café.
B:Oh、
・
・
・

まだまだ会話は続いたようですが、子どもたちの会話が盛り上がったのは間違いありません。子どもたちはきっと英語で会話することの楽しさを味わい、できるという自信を持ったことでしょう。

単元を通して繰り返し会話を積み重ねること、自然な対話にするため相づちや質問、確認などに配慮すること、大事にしていきたいと思います。

つい”Listen to me.”や”Repeat after me.”で子どもたちに英語を聞かせたり、英語を言わせたりする練習をしてしまいがちですが、指導の工夫をして、子どもたちが自然と英語に聞き入ったり、つい英語を口に出す場面を作り出していきたいものです。

Ｃ氏のコメント

中学校において、あるテーマを設定し、子ども同士が英語で自由にやりとりをする場面を、日常の授業でどの程度設定しているでしょうか。

小学校では、「Small Talk」や「Let’s Talk」の活動場面がほぼ毎時間設定されていますが、子ども同士が英語で自由にやりとりする場面を中学校においても意識的に設定してほしいと思います。

新学習指導要領には、小学校高学年と中学校の英語の目標として、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やりとり）」「話すこと（発表）」「書くこと」の５領域が示されています。特に、「話すこと（やりとり）」では、即興で伝え合う力も求められています。

このような背景のもと、本実践では、単元の中で即興的に会話をする上でのストラテジー（困難な状況を回避、または乗り越えるための方略）を段階的に身に付けられるようにしており、最後の時間で、そのすべてを総動員して生徒同士が自分の夢について語り合う場面を設定しています。

このような会話場面を十分に設定してきたわけではないため、本授業では自分の思いを即興的に

伝えられる力を十分発揮できていない生徒もいました。しかし、この授業をきっかけにして、「持つと英語で自由に話せるようになりたい」と思う生徒が増えたのではないかと思います。教師は、このような生徒の願いが達成できるように、３年間をかけて段階的に力を高めていってほしいと願います。

３　連携による研修についての考察（連携を推進・維持するための要点・連携により得られる利点・今後の課題等）

連携を推進・維持するためには、「利益」が一方通行ではなく双方向であることが大事であると考える。長野市教育委員会と信州大学とは、学校及び地域における教育の充実、発展と人材育成に寄与することを目的とする協定を結び、長野市における教育について包括的に連携している。

このような包括的な協定を結んでいることが、本研修プログラム開発事業も含めた 24 項目の個別事業一つひとつの連携を円滑に進め、維持していく支えとなっている。

長野市教育委員会は、本事業で信州大学と連携することによって、組織内部人材のみによる研究で陥りがちな狭い議論で終わることなく、最新の教員養成に関わる情報とともに、大学教員の広く深い知見によるアドバイスを得ることができる。

これまで、「教師としてのキャリアデザイン設計を意識した課題探究型初任者研修プログラム」（平成 24 年）、「学力向上・生徒指導の充実を支える教員のキャリア成長に合わせた教員研修プログラム」（平成 25 年度）、「教育センター集合研修と教員免許状更新講習との協調によるミドルリーダー育成研修プログラムの開発」（平成 26-27 年度）、「小・中・高を一貫する系統的な教育課程の編成と教育実践に向けた教員のカリキュラム・マネジメント能力育成のための研修プログラムの開発」（平成 29 年度）などに取り組んできた。これにより、本市教育委員会は、県費負担教職員の研修を行う中核市として、研修の体系をキャリアステージに応じたものに整備し、見直すことができ、この体系に沿って個々の研修講座を見直し続けることができている。

信州大学との連携による教員研修の充実については、研修プログラムの開発とこれまでに協働で開発した集合研修講座の指導を大学教員が担当することで、理論的な面からの充実を図っており、今後も実施内容については拡充していく予定である。

特に、現代的課題とされる「養成・採用・研修」という系統的な教員の資質・能力の向上の観点から、集合研修に留まらず、市内各校での教育実践にも積極的に大学教員が関わって行くことで、学校がかかえる課題や教員個々の課題を明確にし、それぞれの研修を深めるための視点を明確にする活動を充実させていきたいと考えている。

同時に、大学の教職課程で学ぶ学生が、教員研修の授業を参観したり、現職教員やセンターの指導主事が学生に対して指導したり協働で学んだりするといったプログラムも開発したことで、学生にとっては臨床的に学ぶ場に、教員にとっては自分の実践を振り返り課題を見つける場となっており、「学生の学び」と「教師の学び」の相乗効果が見られているので、今後一層の充実を図りたい。

今後も、長野市教育委員会と信州大学との連携は、協定により継続する。平成 31 年度の本事業では、「自己課題研究を支援する若手教員の力量向上プログラム」を開発する計画であり、プログラムの中身に直接かかわる面では、これまでの、集合研修講座の講師という形に留まらず、教員の研究に随時助言をしていただくという、より身近な形へ進展させることを目指す。

また、プログラムの開発面での連携では、定例的な研究会では日程の都合が合いにくかったり時

間的な制約があったりして、十分な助言が求めにくい面があったが、より効果的に助言・指導を受けられるよう随時相談ができる体制を整えていく必要がある。

４　その他

［キーワード］　カリキュラム・マネジメント　　カリ・マネ　　組織マネジメント
研修用ビデオ　　校内研修　　自主研修

［人数規模］　D
補足事項（平成 30 年度実施し、本報告書に記載した研修講座における最多人数）

［研修日数(回数)］　C
補足事項（平成 30 年度実施し、本報告書に記載した研修講座数）

【担当者連絡先】

●実施者

実施者名		長野市教育委員会
所在地		〒380-8521 長野県長野市大字鶴賀緑町 1613 番地
事務担当者	所属・職名	長野市教育センター・所長補佐
	氏名（ふりがな）	長谷川　浩一　（はせがわ　こういち）
	事務連絡等送付先	〒380-0905　長野市大字鶴賀 550 番地 2
	ＴＥＬ/ＦＡＸ	026-226-7486　／　026－264－7570
	Ｅ－ｍａｉｌ	syotyouhosa@nagano-ngn.ed.jp

●連携機関

実施者名		国立大学法人 信州大学
所在地		〒390－8621 長野県松本市旭３―１－１
事務担当者	所属・職名	学務部学務課・課長
	氏名（ふりがな）	土屋　賢一　（つちや　けんいち）
	事務連絡等送付先	〒390－8621　長野県松本市旭３－１－１
	ＴＥＬ/ＦＡＸ	0263－37－2428
	Ｅ－ｍａｉｌ	campus-edu@shinshu-u.ac.jp